
10 《ディケイド》 × 40 《オールライダー》

作者 B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10《デイケイド》×40《オールライダー》

【Nコード】

N6860Y

【作者名】

作者B

【あらすじ】

仮面ライダーをクロスさせるなら、デイケイドでよくね？という発想の元、「オース・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー」の主人公にデイケイドを加えてみました。最初の方は原作通りの展開なので、デイケイドの活躍が見たい人は後半まで待つて下さい。あと、映画を見てない人でも分かるように書いていくつもりなので気軽に読んでみて下さい。

最後に、これが初投稿作品です。至らない点が多々あると思います

が、ご了承ください。

プロローグ（前書き）

「仮面ライダーは、無敵だ！」

「正義 仮面ライダー2号」

「V3がいる限り、野望は遂げせん！」

「待ってくれ首領！貴方は人類を滅ぼすつもりか」

「見ていてくれ、オヤジ……」

「オレ、トモダチタスケル」

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！」

「君も人生に命を懸けてくれ」

「人の夢の為に生まれた。この拳……この命はその為のものだ！」

「俺は……仮面ライダー10号」

「俺は改造人間、南光太郎！！」

「この世に光がある限り、俺は何度でも蘇る！！」

「行かなきゃ……誰かが俺に助けを求めてる……！」

「みんな一生懸命生きてるんだ。それを壊しちゃいけない」

「Jパワーの戦士」

「これ以上、誰かの涙を見たくない!」

「俺は戦う!アギトの為に、人間の為に!」

「誰かを助ける為だけに変身する」

「俺には夢は無い。でも、守ることは出来る」

「戦えない、大勢の人の為に……俺は戦う!」

「鍛えてますからっ」

「俺は既に未来を掴んでいる。そしてこれからも……掴み続ける」

「俺、参上!」

「皆を守ってみせる」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ!」

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「楽して助かる命がないのは、何処も同じだな」

『『『変身!』』』

ブローグ

「あゝ、こりゃ駄目だ。一度ばらして修理しないと」

そう呟いたのは、光写真館を営んでいる”光荣次郎”だ。

「ああ、直るんならそれでいい。修理の間、代わりになるカメラを貸してくれ」

返答したのは居候の”門矢士”。どうやら、彼のカメラが壊れてしまったらしい。

「別にいいけど……レンタル代も含めて、きちんと払ってくれないと困るからね」

「わかったわかった」

「じゃあ……はい、これ代わりのカメラ。僕は修理してくるから」

そう言つて、栄次郎は士にポラロイドカメラを渡し、奥の部屋へ入っていく。

「さて、暫くはこれで我慢するか」

「我慢するか、じゃないですよ！いい加減溜まった付けを払って下さい！」

士に怒鳴っているのは”光夏美”。栄次郎の孫で、この写真館で祖父と一緒に働いている。

「わかってるって」

「もう！土君のわかったは当てにならないんですから。はあ、ユウスケも里帰りしちゃいましたし」

ユウスケとはこの写真館のもう一人の居候である。しかし、今回は登場しないので割愛する。

「お陰で口うるさいのが居ないから、最近は静かでいいな」

「もう！そんなこと言っては駄目ですよ！」

「その通りだぞ、家臣その6。私の世話をする者が一人減ってしまったのだからな」

「誰が家臣だ、誰が……ん？」

光写真館で暮らしているのは4人。では、今の声の正体は何なのか。ふと土が振り返ると――

「降臨。満を辞して」

白い鳥が立っていた。

「貴方はジーク！？」

「おい、鳥！何でお前が居るんだ！」

二人は以前面識があるが、余り良い思い出がないため、とても嫌そ

うな顔をしている。

「家臣の為にこの私自ら出向いたのだ。茶の一つくらい出せんのか、家臣その6」

「お前なあゝッ！」

「落ち着いて下さい、土君！それで……土君の為って、どういつとですか？」

夏美が質問をすると、ジークは近くの椅子に腰かけ話し始めた。

「届け物だ。ほれ、これはお前の物だろう」

そう言つて、懐からあるものを取り出す。

「これは……土君のカード？」

それは、絵柄の描かれていないカードだった。

「そうみたいだな。おい！このカード、どこで拾ったんだ？」

「ん？そうだな、あれは確か……」

土の質問に対し、ジークは回想に入る。

「1〜6ヶ月前の晴れか曇りか雨の日だったなあ」

「……つまり覚えて無いんですね」

「使えない鳥だ」

これ以上の質問は無意味だと士は思い、渡されたカードを眺める。

「そのカード、これから何が起こるのでしょうか？」

「さあな。わかっているのは、また新しい旅が始まるってことだけだ」

そう言うと、士はカードをしまう。

「今日は栄次郎は居ないのか？また私の美しい姿を写真に収めて貰おうと思ったのだが……」

ジークはそう言いながら部屋を徘徊する。

「ああ、そんなに歩き回ると——」

「ぬおっ！」

ジークの足が背景幕の紐に引っ掛かり、そのまま倒れる。
そして、背景絵が次の旅路を示すべく現れる。

「士君、これは……」

そこに映るのは、28人の戦士がズラリと並んだ姿だった。

「これは……」仮面ライダーの世界」

今再び、士——仮面ライダーディケイド——の新たな物語が始まる。

EPISODE・1 変身

「くそっ！あの鳥、後で覚えてろ！」

「でも、ここは一体何処なんでしょう？」

士と夏美は街の外れにあるアリーナの近くを歩いていた。
何故そんな所に居るかというと、それは数分前に遡る。

—
—
—

『おい、家臣その6。さっさと茶を用意しろ』

『誰がやるかつ！』

『士君落ち着いて下さ——え？地震！？』

『何だ！？この揺れは何事か！？』

『おい、落ち着け！』

『ジーク、そんなに暴れると危ないですよ！』

『うるさい！家臣その6！さっさと揺れを収めてこい！』

『ちよっ、押すな——うわっ！』

『土君！？きゃっ！』

そうして家から追い出され、気付いたら此処に居たというわけである。

「それにしても土君。今回は服が変わりませんでしたね」

行く先々で服装がコロコロ変わる土だが、今日は何時もの私服である。

「ああ。まあ、当然といえば当然だな」

「え？それはどういう——」

『キシャーッ！』

「「！」「」

ことですか？と言い切る前に、明らかに人間の物ではない声に遮られた。

「今のは……」

「土君！あっちです！」

夏美が声のした方を指し、二人でそこへ向かう。

「あれは一体……」

そこでは、カマキリを擬人化したような怪人と、黒を基調とした赤黄緑の上下3色の戦士が戦っていた。

「あいつは、”仮面ライダー^{オーズ}OOO”」

「オーズ？」

「ああ。欲望の結晶”コアメダル”を駆使して戦うライダー。3枚のメダルを組み合わせることで、ありとあらゆる状況に対応することが出来る」

士はポラロイドカメラで写真を撮りながら説明口調で話す。

「オーズ……つまり、ここはオーズの世界なんですね？」

「いや、違う」

「?どういうことですか？」

夏美の疑問に、士は出てきた写真を眺めながら答える。

「ここは仮面ライダーの世界。あらゆるライダーの物語が重なり合う場所だ。ほら、見てみる」

「え?……あつ、士君の写真が!」

渡された写真には、今戦っているオースの姿がピンぼけせずに写っていた。

「ここは俺の世界とも重なっている。だから写真もちゃんと写る」

『トリプル スキャニングチャージ』

『セイヤーッ!』

「おっと、向こうも終わったみたいだ」

再びオースに視線を戻すと、先ほどのカマキリ怪人——ヤミー——を倒していた。

「さて……とりあえず会ってみるか」

「そうですね」

二人はオースに向かって歩きだそうとした。すると……

「おいお前ら、何をやっている」

金髪に白いシャツ、赤いジャケットを羽織った男に呼び止められた。

「あつ。あの、私達は——」

「お前……グリードか」

「!」

士の言葉を聞いた途端、男の目が見開いた。

「グリード？」

「ああ。数枚のコアメダルと無数のセルメダルできている怪人だ。どうやらオーズとは協力関係にあるようだか……」

そこまで言うと、男は威嚇するような眼で士を睨む。

「貴様……一体何者——」

『ぐあっ！』

「「「！」「」」

オーズの声に振り返ると、オーズは先ほどのヤミーとはまた別の、3体のモグラの怪人に襲われていた。

「何やってんだ、映司！」

『アंक！何かこいつら変なんだ！メダルを出さない！』

「なんだと？」

アंकと呼ばれた男と映司——仮面ライダーオーズ——には、見覚えの無い怪人のようだ。しかし士と夏美は、それをよく知っていた。

「あれはイマジン？まだ居たのか」

「士君！」

「ああ」

士はベルトを腰に装着し、ライドブッカーからカードを取り出す。

「変身！」

『k a m e n r i d e r D e c a d e』

カードをベルトに入れると、電子音と共に士は仮面ライダーディケイドへ変身する。

「お前、一体……」

アंकの呟きに答えることもなく、ディケイドはオーズのところへ向かう。

「くそっ、このままじゃあ……」

オーズは、連戦に加え3対1の状況のため苦戦しているようだ。

「うわっ！離せ！」

オーズが2体のモールイマジンに捕まり、3体目が攻撃を仕掛ける。

「うわぁっ！」

そしてそのまま吹き飛ばされ、地面を転がる。

「オオオー」

モルイマジン達は、ジリジリとオーズにとどめを刺すべく近づいていく。その時――

『a t t a c k r i d e b l a s t』

電子音が鳴り響くと、銃撃音と共に弾丸がモルイマジン達に当たる。

「!?!」

突然の銃撃に、オーズは撃ち手がいるであろう方向へ振り向く。

「危なかったな」

そこには、ピンクと白のボディに十字のラインが入った仮面ライダー、ディケイドが立っていた。

「貴方は一体……」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面、ライダー？」

オーズが立ち上がると、イマジン達も立ち上がり再び戦闘体勢に入

る。

「いくぞ」

『attack ride slash』

ライドブッカーが剣の形に変わり、ディケイドはそのままイメージに向かって走り出す。

「はあっ！」

ディケイドが、向かってくるイメージを同時に切りつける。イメージも反撃しようとするが、全てかわされ、もしくはガードされて攻撃が通らない。

「すごい……」

オーズからそんな言葉が漏れた。今まで多くのヤミーと戦ってきたオーズ。しかしディケイドからは、それを上回る程に戦い慣れしているように見えた。

『final attack ride D D Decade』

ディケイドがジャンプすると、イメージとの間に10枚の等身大のカードが並び、そのままイメージに向かってディメンションキック

を放つ。

「はああああっ！」

「オオオーッ！」

そしてイマジンの1体に当たり、その場で爆発する。

「オオー」

「オオオー」

それを見た残りの2体は、これ以上は危険だと判断し逃走を謀る。

「あっ！待て！」

オーズは逃げたイマジンを追った。

「あいつら、何処行っただ？」

イマジンを見失ったオーズは、辺りを見回す。

「うわああ！」

すると突然、子どもの悲鳴が聞こえた。

「あつちか！」

オーズは悲鳴の聞こえた方へ走り出す。

「オォー」

そこには、1人の少年とそれに襲い掛かっているイマジン達が居た。

「危ない！」

すると突然少年の身体から裂け目が生まれ、イマジン達はその中へ入っていった。

「え？」

唐突な事態に一瞬思考が停止するオーズ。すると、少年が崩れるようにその場に倒れる。

「あつ！君、大丈夫！？」

少年の身を案じ、すぐさま駆け寄ろうとするオーズ。

『フアアアン！』

その時、汽笛と共に空から電車がオーズの居る方へ走ってきた。

「な、何だ！？」

電車はやがてオーズに沿うように停車し、その中から1人降りてきた。

「君は……」

青と銀のボディに鋭い赤色の目、その名も”仮面ライダーNEW電王”。時の規律を正すライダーである。

少年にパスを翳すと、イメージが飛んだ過去の時間が表れる。

「1971年11月11日か。今から40年前だな」

「こんな子どもが、何故40年前の記憶を？」

変身を解除した”野上幸太郎”と相棒のイメージ”ティ”が少年を介抱しながら話し合う。

「あの……」

そこに変身を解除した火野映司が話し掛ける。幸太郎とティも映司の方へ振り返る。

「君達は、誰？」

「あんた……誰だ？」

「おい、それはこっちの台詞だ！」

鸚鵡返しのように質問をした幸太郎に対し、苛ついたような口調で合流したアंकが返す。

「そいつは仮面ライダーオーズ。ここを守っているライダーだ。それと……お供のグリード、アंक」

すると、声と共に映司達の後ろから士が歩いてきた。

「お前は、さっきの……って誰がお供だ誰が！」

「またあんたか。今度は何の用だ？デイクイド」

「そう言うな。それに、今回は俺が先客だ」

士は以前、電王の世界で迷い込んできたジークを返しに行った際に、一度幸太郎と会っているのである。

「デイクイド？」

「ああ。俺は門矢士——仮面ライダーデイクイドだ」

映司の疑問に対し自己紹介も兼ねて答える士。

「じゃあ、そっちの君は？」

「野上幸太郎、仮面ライダー電王。俺もライダーだ。あんたと同じな」

「電、王……」

突然の状況に啞然とする映司。

「イマジンは俺達が責任をもって始末する」

「後ろの奴も言ってたが、そのイマジンってのは何だ？」

「それは私が説明しよう」

アंकの質問に対し、テデイがそれを引き継いで答える。

「イマジンは契約者の記憶を辿って過去へ飛び、自分達の都合の良
いように歴史を変える」

「で、俺達がこのデンライナーに乗って時間を飛んで、イマジンを
始末するってわけ」

テデイの説明に幸太郎が補足する。

「それじゃ、俺達はこれで」

そう言つて、幸太郎とテデイは電車——デンライナー——に乗り込
む。

「おい、映司。俺たちも行くぞ」

「え？ってちよつと待てつて！」

アंकも二人に続き、そのさらに後を映司が追う。

「電王の世界の旅は終わったんだが……一応乗ってみるか」

そうして、土もデンライナーに乗り込んだ。

EPISODE・1 変身（後書き）

補足説明

野上幸太郎

仮面ライダー電王”野上良太郎”の孫であり、現在良太郎の代わり
にNEW電王としてイマジンと戦っている。良太郎と同じ特異点で
ある。良太郎と違いモモタロス達が憑依して変身しても、イマジン
達が武器に変わってしまい憑依も解ける。

テディ

幸太郎と契約しているイマジン。幸太郎に憑依することは無いが、
先端に銃口の着いた銃剣に変身し武器として戦う。

繋がる過去（前書き）

補足説明

仮面ライダーの世界

”仮面ライダーディケイド”の世界観ではライダーの世界はそれぞれが独立している。しかし今回の”レッツゴー仮面ライダー”では、1号、2号……オーズまで全て同じ世界の物語となっているため、『ライダーの物語が重なる世界』Ⅱ『仮面ライダーの世界』とした。（ぶっちゃけこじつけです）

繋がる過去

——デンライナー車内——

「はい、コーヒーどうぞ」

「わーい、やったー！」

デンライナーの客室乗務員、ナオミがコーヒーを配っていき、それを紫のイマジン——リユウタロス——が最初に受けとる。

「ありがとう。……あれ？ナオミちゃん、カップが多くない？」

次に受け取った青いイマジン——ウラタロス——が、何時もより多いカップを見てナオミに問いかける。

「これはですねえ、あちらのお客さんの分ですよ」

「お客さん？」

そう言うと、ナオミは奥に居る乗客にコーヒーを配りに行った。

「はい、どうぞ」

「あつ、ありがとうございます。」

そのコーヒーを受け取ったのは、先ほど乗り込んだ映司とアंकだ。

「ああん？何なんだお前ら」

その二人を見て、赤いイマジーン——モモタロス——が突っ掛かってきた。

「あ、いや、アंकが電王の仕事手伝えって言うから……」

「はあ？アंकだかタンクだか知らねえが、余計なお世話なんだよ！」

「お世話だー」

モモタロスの言葉をリュウタロスが煽る。

「それと……」

モモタロスはそのまま振り返る。

「なんでてめえまで居るんだよ！」

今度は、いつの間にか乗り込んでいた土に突っ掛かる。

「相変わらず騒がしい奴だ」

「ああん！？やんのかコラァ！」

「ちょっと、落ち着いて！土君も喧嘩を売らないで下さい！」

喧嘩腰の二人を仲裁する夏美。

「落ち着きなよ、先輩。それで……君たちは何で乗ってるの？別に手伝いに来たとかじゃないんでしょう？」

「ああ。そこを開けてみれば解る」

士が指したのは、デンライナーの客車の後方の扉だった。

「？どついう意味だ、そりゃ？」

疑問に思いながらも、モモタロスは扉を開けた。

「なんだこりゃああああ！！」

モモタロスの目の前には、一軒家の客間のような部屋が広がっていた。

「どつやら、デンライナーと光写真館が繋がってしまったみたいなんです」

夏が補足で説明をする。

「ふむ。よく来たな、家臣どもよ」

「あ！手羽野郎！なんでてめえまでいやがる！」

「ああ。そいつ、こつちに紛れ混んでたんだ。引き取ってくれ」

「こつちだって願ひ下げだ！」

「家臣ども、苦しゅうない」

「お前は黙ってるッ！」

「あはは。何か賑やかだな、アंक」

「映司、あの出来損ないのヤミーを黙らせる。さっきから煩くてイライラしてくる」

「誰が出来損ないだ！？誰が！」

「否定するのはヤミーの方でしょう？前半は合ってるし」

「ああ、確かに……ってどういう意味だ、亀！」

モモタロス達が騒いでいると、前の扉からオーナーが現れた。

「乗ってしまったからには、仕方ありませんねえ」

そう言いながら、持っていたステッキでモモタロスとウラタロスの取っ組み合いを止める。

「しかし、過去への介入は絶対に許しません」

今度はアंकと映司を見ながら話す。

「場合によっては、とんでもないことになってしまいます」

「そうなんですか!？」

オーナーの言葉に驚きの声を上げる映司。

「ええ。ですから、絶対にデンライナーからは……降りないで下さい」

オーナーは再び、特にアंकを諭すように、忠告をした。

——1971年11月11日——

「オォー」

「オオォー」

「見つけた！いくぞ、テディ！」

『ああ』

NEW電王に変身した幸太郎と剣に変身したテディはデンライナーから降り、見つけたイマジンと対峙する。

『幸太郎、タイムは？』

「そつだな……」

そう言いながら、2体のイメージを見る。

「12秒あれば十分だな」

『おもしろい』

「いくぞ！」

『12、11、10……』

デディのカウンtdownと共にNEW電王がイメージンへ向かっていく。

「……………あの、大丈夫だって。俺、ここから動かないから」

映司は今、モモタロス達に囲まれていた。

「あかん」

最初に口を開いたのは、黄色のイメージン——キンタロス——だ。

「オーナーから絶対に目え離すなって言われてるんや……………ZZZ」

「寝るなバカ！」

キンタロスにツッコミを入れるモモタロス。

「おい」

「お前はともかく、その金髪トサカは信用ならねえ」

「おいって」

「それを言われると……」

「おいっ！」

「うつせえ！何だ！」

さつきから呼び掛けていた土に、モモタロスが返事をする。

「アंकならもう居ないぞ」

「何言ってるんだ。此処にしっかり……ん？トサカが黒いぞ？」

「！アंकが居ない！何処行った！？」

アंकは現在右腕しか復活して居ない為、人間の肉体を借りていた。よってアंकは腕だけでも動けるのだ。

「それならほら、そこだ」

土が窓の外を指すと、そこには脱走したアंकがいた。

「あーっ！連れ戻さない！」

「よし、行つてこい！」

モモタロスにそう言われるや否や、映司はアंकを捕まえに外へ飛び出す。

「あれ？目を離しちゃ不味いんじゃないの？」

「あーっ！しまった！いくぞお前ら！」

そのあとをモモタロス達が追う。

「土君、私達も……」

「ほつとけほつとけ。あいつらだけで十分だ」

土は完全に傍観の姿勢のようだ。

しかし、この出来事が後の大事件を生むとはこの時誰も想像すらしなかった。

「はああああ！」

NEW電王が走りながらイメージを切り裂き、イメージはそのまま爆発する。

「ふう……ん？1体足りないぞ」

一方映司は……

「見つけたぞアंक！外に出たら駄目ってオーナーに言われただろ！」

メダルを持って宙に浮いているアंकを掴みながら、文句を言う映司。

『うるさい！この時代なら、まだ他のグリードは目覚めてない。メダルは取り放題だ！』

「やっぱり、そんなことだろうと思った！さあ帰るぞ！」

逃れようとするアंकとそれを止める映司で綱引きの状態になっていた。

「オォー」

「うわっ！」

そこへ、NEW電王から逃げてきたイマジンとぶつかり盛大に転ぶ二人。

「見つけた！はああああ！」

追ってきたNEW電王が、イマジンを一刀両断する。

「オオーッ！」

そしてそのままイマジンが爆発する。

「うわああッ！」

二人は爆風で吹き飛ばされ、アंकの上に映司が落下し、思わずメダルを離す。

『映司！邪魔だ、どけ！』

「お前ら、いたぞ！」

すると向こうからモモタロス達が追いかけてきた。

『不味い！』

「僕に釣られてみる？そらっ！」

逃げようとするアंकを、ウラタロスが網で捕まえる。

『離せ！』

「もう逃げられないよ」

「大人しくしろ！」

そうして退散していく一行。

「……イーツ？」

その場に一枚のメダルを残して……

繋がる過去（後書き）

作中でアंकがヤミーを作ろうとしている場面で、「まだこの頃のアंकってヤミー作れないんじゃないの？」と思われるかもしれませんが、原作でもやっていたのでそのままにしました。

変わる運命（前書き）

今回は短めです。

変わる運命

「「「「「「.....」」」」」」

「.....ほら、アंक謝れって」

「ふんっ」

アंकと映司はモモタロス達に囲まれて、責め立てるような視線を向けられていた。

「それでは、帰りましょう」

オーナーがその場を促し、一行は映司達の時代へと戻って行った。

——現代——

「時の列車、デンライナーかぁ.....すごいなあ」

映司は走り去っていくデンライナーをみて言葉をこぼす。

「アंक！俺たち時間旅行したんだぞ.....ってどうしたんだ？」

アंकはしかめっ面をして、辺りを見ていた。

「……気に入らないな」

「？お前が何か気に入ることなんてないだろ？」

「……静か過ぎるんだよ。得体の知れない欲望が、他の欲望を抑えつけてる」

「？」

そこは、街の側とは思えないほどの静寂に包まれていた。

——デンライナー車内——

「まったく、人騒がせな野郎だったぜ！」

「まあまあ、何事もなく良かったじゃない」

苛ついているモモタロスをウラタロスが宥める。

「それはそうと……お前ら何時まで居座る気だ！」

モモタロスは、我が物顔で居座っている土に向かって怒鳴り散らす。

「しょうがないだろ。家がここにくつついてるんだ」

士はカードを整理しながら、面倒くさそうに返事をする。

「お邪魔してしまってすいません」

「いやいや、夏美ちゃんが謝ることはないよ」

すまなそうにする夏美に優しくフォローするウラタロス。流石というべきかなんというか……。

「……」

「どうした？幸太郎」

表情の優れない幸太郎を見て、声をかけるテディ。

「ああ、いや。何でもない」

「そうか？なら良いのだが……」

しかし一向に幸太郎の表情は晴れない。

（何だ？この胸騒ぎは……嫌な予感がする）

その時、デンライナーが激しく揺れる。

「うわっ！」

「何やつ！何事やつ！？」

「うわゝ揺れるゝ！」

「ちょっと、リヨウタ押さないで！」

突然の事態に、一同はパニックを起こしていた。

「皆、落ち着け！」

「手すりか机に掴まるんだ！」

デイと幸太郎の指示により、皆身体を固定して揺れをしのぐ。そしてしばらく揺れた後、揺れは次第に収まっていった。

「ふう、もう大丈夫みてえだな」

「それにしても……今の揺れは何やったんや？」

「何か時間に大きな影響が出た、とか？」

モモタロス達は無事のようにだ。

「いてて、何なんだ一体？」

椅子から落ちた様子の土。一応無事のようにである。

「つ、土君！」

「ん？どうしたんだ？夏みかん」

「これ、見て下さい!」

夏美が指したのは、士が整理していたライダーのカードだ。

「どうしたって……………!?!」

カードを見た瞬間、驚きのあまり目を見開く士。

「どうしたんだよ?」

「なににー?」

モモタロス達も集まってくる。

「これは……………」

「ライダー達の絵が……………消えてる?」

士のカードからは、ディケイドと電王以外のライダー達の絵が消えていた。

「どういうことだ? 一体なにが……………」

「どうやら、大変なことになってしまったようですねえ」

士達が啞然としてみると、奥からオーナーがやってきた。

「大変なこと?」

「どういふことですか？オーナー！」

幸太郎とテディがオーナーに質問する。すると次の瞬間、オーナーの口から衝撃的な言葉が放たれた。

「おそらく……仮面ライダーが、歴史から消滅してしまったのでしよう」

「何だと!？」

——現代——

「Amigo? そんな……ここは——Cous Couscierだ
アミーゴ クスクシエ
ったはず……」

一度帰路に着いた映司とアंकの二人。しかし、そこにあったのは
Cous Couscierではなく、Amigoと看板に書か
クスクシエ アミーゴ
れている廃墟だった。

「……」

アंकは遠慮せずにかずかと中へ入って行ってしまった。

「あつ、ちょっと待てよアंक！」

映司は慌ててその後を追う。

ギイッという音を鳴らしながら扉を開け、中に入っていく二人。そこには、散乱した机と瓦礫の山で埋め尽くされていた。

「比奈ちゃん、知世子さん。居ませんかー？」

映司が呼び掛けるが、二人の声は返ってこない。

「一体何がどうなってるんだ……」

思わず言葉が洩れる映司。

「！」

突然、アंकが瓦礫の奥の方へ振り向く。

「どうしたんだ？アंक」

「そこに誰か居る」

「え！？」

すると、瓦礫の奥から一人の子供が出てきた。

「お兄さん達、誰？」

そして奥からずらすると、一人、また一人と子供が出てきた。

「君達、こんなところでどうしたの！？学校は！？」

「学校？あんなシヨツカーみたいな悪い奴らが作ったところ、行けるわけないよ！」

映司の言葉に大声で反論する子供たち。

「シヨツ、カー？」

「そうさ、シヨツカーに選ばれたエリートだけが学校に行くんだ。シヨツカーの戦闘員になる為に。40年前に日本が支配されてから、ずっと……」

子供たちからの言葉に啞然とする映司。

「どういうことだ？40年前……俺達が時間旅行から帰ってくるとき、別の世界に来てしまったとでもいうのか？」

「……お兄さん達何なの？こんなこと誰でも知ってる——」

《ピーッピーッピーッ》

子供たちの内の一人が映司達に尋ねようとしたとき、突然何処からか機械音が聞こえてきた。

《これより、国連でシヨツカーの決定が放送される。愚かな人間どもよ、テレビの前に集合しろ。繰り返し——》

「国連がシヨツカーの決定を？この世界どうなっているんだ？」

「シゲル」

「うん」

子供たちは灯りを持ち、家の奥へ歩いて行く。

「ミツル、この人達にも見せてあげたら？」

「……」

ミツルと呼ばれた少年は少し考える。

「……来いよ」

ミツルは映司達に向かって言う。どうやら連れて行くことにしたようだ。

そして一同はテレビの前に並び、電源を入れた。

敵か味方か（前書き）

今回はほとんど原作と同じです。

敵か味方か

——シヨツカー本部——

「シヨツカーの唱える未来とは、優秀な人間を選び、動植物の特性を持った怪人に改造し、世界を支配することである。いかがかな？ 諸君」

赤いマントを羽織ったシヨツカー首領が提案をする。

「ゲドンは、シヨツカーの考えに賛成だ」

「デルザー軍団も賛成しよう」

十面鬼ユム・キミルとジェネラルシャドウが同意する。

「クライシス帝国と暗黒結社ゴルゴムは反対する」

ジャーク將軍は立ち上がりながら発言した。

「我々の目的は、全人類の抹殺だ！」

その言葉に大神官ダロムも頷き、周りもざわつき始める。

「ええい！今は争っている場合ではないのだ！」

その中、鶴の一声のようにアポロガイストの声が響く。

「アポロガイストの言う通りだ」

すると、アポロガイストの後ろで横たわっていたキングダークが引き継いで話し始める。

「今我々がすべきことは、大組織同士が手を握ること。GODはシヨッカーに賛成する。」

「……」

考え込むジャーク将軍を見て、シヨッカー首領は再び口を開く。

「いかがだろう。世界征服の後のことは、また我々だけで決めればいい」

「……ならば、我々も賛成しよう」

そして、ジャーク将軍と大神官ダロムも同意した。

「今ここに、全ての組織はシヨッカーに統合され、世界の平和を乱す愚かな人間どもを排除することが決定した！」

『——以上が国連での決定です。繰り返します——』

「ふんつ。要するにシヨッカー以外の人間は全て殺すってことか」

「どうしてこんなことに……世界はどこで間違ってしまったんだ」

アंकはどこか気に入らなそうに、映司は愕然とした様子で呟く。

「そんなこと言う人初めてだよ。お兄ちゃん達、何なの？」

子供たちの一人、ナオキが問いかける。

「あ、ああ、実は俺た——」

「大変だッ！」

映司が答えようとした時、外からシゲルが大声を上げて走ってきた。

「シゲル、どうした!？」

「シヨッカーの奴らが来る！」

「なんだって!？皆、隠れるんだ！」

その時、外から扉を蹴り飛ばしながらシヨッカーの怪人達が入ってきた。

「出てこい！不穩分子の一斉検挙だ、抵抗するな！」

そう言いながら続々と中に入ってくる。

「おい、ここで間違いないんだな」

「イーッ」

「そうか」

一歩、また一歩と奥へ歩いていく怪人達。
すると、奥から映司が消火器を持って現れる。

「このっ！」

映司が怪人達に向けて消火器を吹き付ける。

「うわっ、何だ!？」

怪人達は混乱していて、うまく動けない。

「皆、第二アジトに集合だ」

「わかった」

「ほら、お兄ちゃんこっち！」

ナオキが映司に声をかけると同時に、皆外に向かって走り出す。

「くそっ、追え!逃がすなッ！」

「「「イーッ!」」」」

怪人の一人が声を上げると、戦闘員達が一斉に動き出した。

「お兄ちゃん早く!」

ナオキに手を引かれ、ミツルと共に走り続ける映司は今、一本道に出ていた。

「ここまで来れば、大丈夫かな?」

少しスピードを落としながら息を整える3人。
しかし、その見通しは甘かった。

「そのこの3人、止まれ」

前方には、ショッカーの怪人と戦闘員が待ち構えていた。そして、その中には……

「シゲル!」

「このガキの命が欲しくば、大人しく投降しろ」
逃走の途中で捕まったシゲルが居た。

「ミツル……助けて……」

弱々しい声で助けを求めるシゲル。

「……………」

ミツルは無言のまま、シゲルとショッカー達を見る。

「…………いくぞ」

小さな声でそう言うと、そのまま後ろへ振り返る。

「助けないの!？」

その場を離れようとするミツルの腕を掴み、引き留める映司。

「ショッカーに齒向かって、どうせ勝てない」

「でも仲間なんだろう!？」

「…………捕まる奴が悪い。弱い奴は…………見捨てるしかないんだ」

シゲルの方を再度見ながらそう呟いたミツル。その手は、血が出るのではないかという程強く握られていた。

「ミツル…………」

「俺達はそうやって生き残ってきた! そうだろう!？」

「それは…………」

ミツルの言葉に、何も言い返せないナオキ。

「あんな悪い奴らの言いなりになってて良いの!？」

「いい分けないさッ！」

映司の腕を振り払って反論するミツル。

「だから……いつか、あいつらよりも悪くなつて、強くなつて……復讐してやるよ」

その言葉には、強い憎しみと怒りが込められていた。

「ミツル君、そんなの間違つてるよ！」

今度は両肩を掴み、ミツルに言い聞かせる映司。

「早くしろ！」

痺れを切らしたのか、大声を上げる怪人達。

それを見て、怪人達の前に立ちはだかる映司。

「？何のつもりだ？」

「……俺は行く。2人は早く逃げるんだ」

そう言うと、映司はベルトを腰に装着し、赤、黄、緑の3色のメダルをベルトに差し込む。

「お兄ちゃん？」

そして、右腰に着いているオースキャナーを取り、ベルトに差し込んだメダルをスキャンした。

「変身ッ！」

『タカ！トラ！バッタ！——タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ』

歌と共に光に包まれ、映司はその姿を変えた。

「お兄ちゃん、もしかして……」

ナオキの言葉に、映司は振り向きながら答える。

「俺はオーズ。仮面ライダー^{オーズ}000だ」

そう言うと、映司——仮面ライダーオーズ——は怪人達に向かって走り出した。

「……どういうこと？仮面ライダーって、ショッカーの怪人の中で一番強い奴のことじゃないの？」

ナオキとミッルは驚愕の表情を浮かべながら、オーズの後ろ姿を見ていた。

「はあっ！」

オーズは怪人達の攻撃を避けながら、パンチやキックを繰り返す。

「ていやあっ！」

「イーッ！」

そして、シゲルを捕まえていた戦闘員を蹴り飛ばす。

「早く逃げるんだ！」

「うん！」

オーズの声を聞くと、シゲルはナオキ達の方へ走って行く。

「シゲル！」

「よし、行くぞ！」

3人は一緒になって走り出す。しかしその時――

ブルルルルルオオオン！
ブルルルルルオオオン！

3人の前方から、2つのバイクのエンジン音が聞こえてきた。

「あれは……」

「まずい、こっちだ！」

ナオキ達は横にあった建物の裏に隠れた。

ブルルルルオオオン！
キキイイイツ！

バイクが怪人達の前で止まる。乗っていた人物は、白い仮面^{マスク}に赤い瞳、黒い体に緑のボディ、そして赤いマフラーを棚引かせ、その姿はバッタを彷彿とさせるものだった。

「仮面ライダー、1号、2号……」

誰かがそう呟いた。

「仮面ライダー？じゃあ味方なのか？」

白い手袋とブーツを着けた1号と、同じく赤いそれを着けた2号は、無言のままオーズに近づいていく。
そして――

「はぁあっ！」

「ぐぁっ！」

オーズに向かって攻撃を始めた。

「どうなっているんだ！？――ぐはぁっ！」

1号、2号の攻撃をまともにくらうオーズ。

「このライダー達は、敵なのか！？うわっ！」

そこに怪人達も加わり、形勢は一気に逆転された。止まない攻撃の嵐に、オーズは為す術も無くやられていく。

「……ほらみる。やっぱり悪の1号、2号のほうが強いんだ」

物影に隠れながらミツルは呟く。

「でも、オーズはシゲルを助けてくれたよ。オーズは味方なんだよ！」

「俺もそう思う」

ナオキの言葉に、シゲルも同意する。

「……だったらどうするんだよ。俺達じゃ、足手まといだぞ」

「それは……」

そう言いながら、3人は再びオーズの方へ視線を向ける。

「こうなったら……」

オーズはコンボチェンジしようと、メダルを取り出す。しかし――

「させるかあっ！ふんっ！」

「うわっ！」

怪人の攻撃によって、手に持っていたメダルが弾かれた。

「め、メダルが——ぐはあ！」

メダルに気を取られていたオーズに2号のパンチが決まり、そのまま吹き飛ばされる。

「あっ！オーズが！」

その光景を見て、思わず声が出るシゲル。

「……」

何か決意を込めた目でナオキがオーズの居る方へ走り出す。

「あ、おい！ナオキ！」

そして、近くに落ちていたメダルを拾い集める。

「オーズ！メダルだよ！」

ナオキはオーズに向かってメダルを投げる。オーズは身体に鞭を打ちながら立ち上がり、メダルを受け取る。

「あ、ありがとう！」

そう言うと、受け取ったメダルをベルトに差し換え、オースキャンナースキャンした。

『ライオン！トラ！チーター！——ラタ ラタ ラトラーター！』

メダルの力により、オーズはラトラーターコンボへとコンボチェンジした。

「うおおおおおっ！」

固有技”ライオディアス”により、怪人達は光に視界を奪われる。

「うわっ！くそっ！」

慌てて目を覆い隠す怪人達。

「今の内に——」

オーズはナオキ達のところへ向かう。

「皆逃げるよ！捕まって！」

「う、うん！」

そう言うと、オーズは3を抱き抱えた。

「うおおおおお！」

そしてチーターレッグの俊足を使い、オーズ達はその場を離れていった。

「……もう撒いたかな？」

オーズは再びタトバコンボへと戻り、辺りを見回しながら3人と一緒に走っていた。

「お兄ちゃん、前！」

「え？」

ナオキに言われて前の方へ振り向くと、等身大もの大きさのトランプが回転しながら飛んできた。

「危ない——ぐわっ！」

ナオキ達を庇ったオーズはトランプに当たり、変身が解けてしまった。

「お兄ちゃん！」

ナオキ達はオーズに駆け寄る。

飛んでいたトランプは地上に降り、その場で回転を始め、やがて人の形に変わった。

「お、お前は……」

映司が声を振り絞って問いかける。

「我が名はジェネラルシャドウ」

「……ジェネラル、シャドウ？」

「まだこの世に仮面ライダーが居たとはな」

そう言うと、ジェネラルシャドウはゆっくりと映司達に近づいていく。映司は3人を庇いながら後ろへと下がる。

「……皆は逃げるんだ」

「もう無理だよ！」

「これ以上やったら、お兄ちゃんも死んじゃうよ！」

弱気な声で逃げるように言うナオキ達。

「……今結構ドン底だけど、この手まだまだ届きそうだ。だから、やってみるよ」

「お兄ちゃん……」

「伸ばせる手を伸ばさなかったら、きっと死ぬほど後悔する。だから、最後まで諦めちゃ駄目だ！」

映司は正面を向きながら、そう叫んだ。

「その威勢いつまでもつかない？」

ジェネラルシャドウがそう言うと、続々とさっき撒いた戦闘員達が

集まってきた。

「シャドウの生き甲斐は仮面ライダーの死。とどめだッ！やれッ！」

「「「イーツ！」「」」

ジェネラルシャドウの合図で戦闘員達が一斉に映司達に襲いかかる
うとした、その時――

フアアアアアン！

汽笛と共に、空からデンライナーが現れた。

「あれは、デンライナー！？」

デンライナーは真っ直ぐと映司達の方へ向かってくる。

「むっ！させるか！」トランプショット”！」

ジェネラルシャドウが攻撃を繰り返すが、走ってきたデンライナー
が映司達の壁となり弾かれてしまった。

そしてデンライナーが通り過ぎると、辺りには誰も居なくなっていた。

「……逃げられたか」

そう呟くと、ジェネラルシャドウは戦闘員と共にその場から去って
いった。

敵か味方か（後書き）

補足説明

シヨツカー本部会議

会議には、作中に出てきた怪人達の他に「ン・ガミオ・ゼダ（クウガ）」「エルロード 水のエル（アギト）」「ケルベロス（剣^{フレイド}）」「アルビノレオイマジン（電王）」「テラー・ドーパント（W）」が居ます。

新たな運命へ

——デンライナー車内——

テディが子供達を誘導し、映司は幸太郎の肩を借りながら、客席のソファアに座る。

「ありがとう。助かったよ」

「礼には及ばない。……でも、君が見た通り歴史は大きく変わってしまった」

「あのトサカ野郎のせいだよ」

「……一体、何が起こったの？」

映司は素直に疑問をぶつける。

「私が説明しよう」

再びテディが解説に入る。

「オーナーの話によれば40年前、シヨツカーは独自に手に入れたコアメダルを改造し、シヨツカーメダルを作った」

「コアメダルを？」

「ああ。しかし、それだけでは何も起きないはずだった」

「お前らがセルメダルを落とすまではな」

説明の途中で、士が口を挟む。

「コアメダルとセルメダル。この2つがあって始めてグリードは誕生する」

「そう。そして、ショッカー戦闘員の手によりセルメダルは首領の本へ渡り、コアメダルと融合して、究極の怪人”ショッカーグリード”が誕生した」

士の補足に続くように、テディも説明を続ける。

「そして、その圧倒的なパワーの前に1号、2号は倒され、洗脳により悪の怪人となってしまった。それから40年もの間、ショッカーによる支配が続いている」

「つまり、1号、2号以降の仮面ライダーは誕生しなかったって訳」
「テディの説明の最後に、ウラタロスが付け加えた。」

「……全部、俺とアングのせいだったんだな」

「お前のせいじゃねえよ、トサカ野郎だよトサカ野郎！一発ガツンと言っとけ！」

落ち込む映司にフォロー（？）をするモモタロス。

「とにかく、俺は今から40年前に飛んで時間を修復してくる」

「！俺も行くよ！」

幸太郎の言葉に食い付く映司。

「いや、歴史を修復出来るのは電王だけだ」

「幸太郎は特異点といって、歴史の介入による映影響を受けない」

「オーズが存在出来ているのも、俺と一緒に居るからだ」

「……何だかよく分からないけど……」

「とにかく、俺達に任せとけて」

あまり理解出来てない映司に、自信に満ちた声で言う幸太郎。

「……なあ、歴史が戻ったらショッカーは居なくなるのか？」

子供達の1人、ミッルがテディに話しかける。

「ああ。正しい歴史では、仮面ライダーがショッカーを倒しているからな」

「本当か？」

「ああ」

テディの言葉を聞いたミッルとナオキは、お互いの顔を見て何か決心したように頷く。

「そういう訳だから、夏美ちゃん達も子供達と一緒に降りてね」

「あ、はい。分かりました。」

「……」

ウラタロスの言葉に、士は無言のまま、夏美は返事をした。

——現代——

デンライナーから降りた映司達は、第2アジトの近くに居た。

「シゲル君！」

すると向こうから、シゲルを呼ぶ声が聞こえてきた。

「あ、比奈さん！」

シゲルは比奈のところへ走っていく。

「比奈ちゃん！？」

知り合いの登場に驚く映司。

「え？どうして私の名前を？」

「？……あつ、もしかして歴史が変わったせいで、俺と比奈ちゃんは会ってないことに……」

「比奈さんは、このアジトで俺達の世話をしてくれてるんだ」

「私、光夏美と言います。よろしくお願いします」

「あつ、これはご丁寧に……」

呆ける映司をよそに、自己紹介をする夏美達。

「あつ！シヨツカーの飛行船だ！」

比奈と一緒に出てきた子供の1人が、飛んできた飛行船を指差す。

『我々は遂に立ち上がった。全世界に派遣されたシヨツカーの、平和を乱す愚かな人間どもを根刮ぎ排除する——』

「もうすぐ嵐がくる。頼んだぞ、幸太郎」

シヨツカーの放送を聞いて、映司は今その場に居ない仲間に望みを託す。

「シゲル君、ミツル君達は？」

「あれ？一緒に降りたはずなんだけど……」

「土君もいません!」

「!まさか……」

——デンライナー車内——

「あーっ!さっきのガキどもだッ!」

モモタロスが、さっきまで子供達が座っていたソファの方を見て叫ぶと、皆一斉に駆け寄る。すると、机の下からナオキとミツルが出てきた。

「俺達にも手伝わせてよ!」

「俺の父ちゃんはショッカーに拐われたんだ!父ちゃんを拐った憎いショッカーに復讐してやりたいんだ!」

ナオキ、ミツルの順に己の思いを口にする。

「お前え……馬鹿言ってんじゃねえ!」

そんな2人に怒鳴り散らすモモタロス。

「あーっ!手のお化けはっけーん!」

リュウタロスがソファアの後ろにあつたものを掴み上げる。

『おいっコラ！離せ！』

「うわっ！」

リュウタロスに掴まれていた右手だけのアंकが、リュウタロスの手を振り払う。

「あっ！てめえ！」

『俺はメダルの持ち主だ。メダルは返してもらおうか』

「もとはと言えばお前のせいやで！」

「そーだそーだ」

「言葉の裏には針千本。君には、何か他の目的があるんじゃない？」

ウラタロスが探るようにアंकに問いかける。

『無い。俺を信じる』

アंकは何の迷いも無く言い切った。

「今さら信じられるか！」

そう言うと、モモタロスはアंकに飛びかかる。

『ふんっ』

「ぬおっ！」

しかしアंकは余裕な様子でかわす。

「いてて……野郎ども、やっちまえ！」

モモタロスの言葉に他のメンバーも反応し、アंकを捕らえにかか
る。

『ちっ』

このままではまずいと、一旦ドアの方へ飛んでいく。

「いけませんねえ」

すると、ドアの向こうからオーナーが入ってきた。

「では、ごうしましょう」

『なあっ！』

オーナーが持ってきた鎖付きの手錠をアंकに付ける。

「モモタロス君が、アंक君のお目付け役となるのです」

オーナーはモモタロスに鎖を渡す。

『くっ！俺を犬扱いするつもりか！？』

「はい。君はまた、40年前に戻ってメダルを探すつもりだったんですよねえ？」

『はっ、悪いか！』

「よし、俺は犬は苦手だけどお前なら大丈夫なんだよ。よしお手だ！お手！」

『ふんっ』

「いでっ！……てめえ、それがご主人様に対する態度か！？コラア！」

アंकとモモタロスが取っ組み合いを始める。

「まったく、少しは静かにしろ。うるさいぞ」

「うるせえ！……ん？」

そこにはまた1人、不正乗車犯がいた。

「あーっ！てめえまだ乗ってたのか！」

さっきの声の主は士だった。

「俺も手伝ってやる。戦力が多い方が良くからな」

「余計なお世話だ！大体、特異点でもねえお前がそんなこと出来る訳ねえだろ！」

「お前こそ忘れたのか？電王の世界に行った時、一緒に過去に戻ってイマジンを倒しただろ」

「……あり？そうだった？」

そう。士はその時、自前のパスを使って過去に飛びイマジンを倒したのである。

「だが今回はメダルの回収だ。我々だけでも十分だと思うのだが……」

「さて、どうかな」

「？」

テディの言葉に対し、意味深な返事をする士。

（もしアイツが動くなら、それだけでは済まないかもしれないしな……）

「それでは、最初に行った40年前の更に1分前に、レッツラゴー」
オーナーの指示で、デンライナーは再び40年前を目指して走り出した。

——1971年11月11日——

「幸太郎、見つけたぞ」

「ああ」

幸太郎とテディは、モルイマジンとそれを倒した自分達を見つけた。

『うわああッ！』

過去のアंकと映司が吹き飛ばされ、アंकがメダルを落とす。

「あれだな」

幸太郎は過去の自分達に見つからないように、メダルを回収する。

「よし、これで一件落着だな」

「ああ」

そして2人はデンライナーに戻っていった。

——デンライナー車内——

帰ってきた幸太郎達はカウンターに腰掛ける。

「しかし、メダル1枚のせいでこんなことになるなんてな」

幸太郎はメダルを眺めながら呟く。

『俺のメダルだ！返せ！』

「うおっ！」

急にアंकが動き出した為、モモタロスが持っていた手錠が引つ張られ、取れてしまった。

「うわっ！」

アंकが飛び込んできたせいで、幸太郎が持っていたメダルが弾かれ宙を舞う。

『よし！もらった！』

「させるかよ！」

「くそっ！」

我先にと、アंक、モモタロス、幸太郎がメダルに手を伸ばす。

『取った！』

メダルを手にしたのはアंकだ。

「てめえ、この野郎！そいつをよこせ！」

しかし、アंकは再びモモタロスに捕まる。

『離せ！』

「暴れんな！コラ！」

手を振りほどこうと左右に動きだすアंक。

『おらっ！』

「うおっ！」

パリイインッ

力いっぱい動いたせいで、アंकは窓ガラスにぶつかり、窓ガラスが割れてしまった。

『ぐっ！』

「ああーっ！メダルがあーっ！」

ぶつかった衝撃で、アंकはまたメダルを落としてしまった。

『俺のメダル！』

「おい！ちよつと待てギャーッ！」

アंकはメダルを追いかけて客車の出口から外へ飛び出し、それを掴んでいたモモタロスもつられて一緒に飛び降りてしまった。

「メダルが！」

「行くぞ！幸太郎！」

「ああ！」

2人の後を追って幸太郎とテディが飛び降りる。

「ナオキ」

「うん」

それを見て、ナオキ達も外へ飛び出す。

「……嫌な予感がするな。俺も行くか」

最後に士も、その後を追った。

伝える絆（前書き）

作者は戦闘描写が苦手です。それを踏まえて読んで下さい。

伝える絆

「さてと、メダルは何処だ？」

再び1971年の時間に来た士は、1人でメダルを探していた。どうやら、他のメンバーとははぐれてしまったようだ。

「おーい、そこの子供達。ここに銀色のメダルが落ちてなかったか？」

「見てないよ。なあ？」

「うん」

「そうか……………ん？」

士は聞き込みをしていると、白い帽子と白いシャツ、赤いネクタイをし、仮面ライダーのペンダントを付けている子供達を見つけた。

「あれは…………少年仮面ライダー隊？」

少年仮面ライダー隊。仮面ライダーをサポートする為に結成された少年少女で構成されているチームである。

「ちょうどいい。おーい！ちょっといいか？」

士は少年仮面ライダー隊に声をかける。

「？どうかしたの？おじちゃん」

「おじつ……まあいい。お前達、銀色のメダルを見なかったか？あれがショッカーの手に渡ると大変なことになる」

士の言葉を聞いた子供達は、懐疑の目を向ける。

「警戒するな。俺は味方だ」

それに気が付いたのか、懐から1号、2号のカードを取り出し、子供達に見せる。

「ねえ、このおじちゃんは大丈夫そうだよ」

「おじちゃんはやめろ……で、どうなんだ？」

「いや、見てないよ」

「俺も」

子供達は揃って見ていないらしい。

「そうか、弱ったな……」

士が困り果てていると、突然子供達の持っていたスピーカーから音声の流れてきた。

『こちらノツコ。ショッカー発見！』

「なんだって!？」

「大変だ！皆、ノッコを助けに行くぞ！」

「「「おう！」「」」

そう言うと、少年仮面ライダー隊は自転車に乗って走り出した。

「あつ！待てお前ら！」

士も慌ててその後を追った。

一方その頃……

「あつたぞ！メダルだ！」

モモタロス達は幸太郎達と合流し、転がって行くメダルを追っていた。

チャリンッ

「？」

すると、自転車に乗っていた少女の足下にメダルがぶつかった。

「何かしら？これ……」

白い帽子に白いシャツ、赤いネクタイ、そしてペンダントを着けて

いる少女はメダルを拾い上げる。

「おーい！」

その少女に幸太郎は声をかけ、皆で近付いていく。

「そのメダル、俺達のなんだ」(少年A)

「渡してくれないか？」(見た目青鬼)

『さつさとよこせ！』(赤い手のお化け)

「てめえは黙ってる！」(見た目赤鬼)

「……」

少女は自転車に股がり、一目散にその場から離れた。

「あつ！ちよつと待って！」

それを見て、慌てて後を追う幸太郎達。

「こちらノツコ。ショッカー発見！」

「こらーっ！俺達はショッカーなんかじゃねえーっ！」

そう叫びながら必死に追いかける。

ノツコがある程度幸太郎達と距離を離れた時、目の前にナオキ達が飛び出す。

「「止まれ！」」

その声に、思わずブレーキをかけるノッコ。

「そのメダル、渡して」

ナオキが手を出して言う。

「……あんた達何なのよ？」

「お前こそ、その格好何なんだよ」

ノッコの質問に質問で返すミッル。

「私は少年仮面ライダー隊よ」

「「少年仮面ライダー隊？」」

ナオキとミッルはそんな馬鹿なとお互いの顔を見ながら啞然とする。それもそのはず、2人にとって仮面ライダーとは悪の改造人間なので、そうなるのは仕方のない事かもしれない。

「や、やつと追いついた……」

「あっ！あのガキども、脱走してやがったのか！」

「げっ！」

「まずっ……」

やっこのことで追いついた幸太郎達。

「「「「やあーっ!」」」」

「うおっ!危ねっ!」

そこへ、ノツコと同じような格好をした少年達が自転車に乗りながら幸太郎達の行く手を遮る。

「ノツコ、無事か?」

「みんな……」

どうやらノツコのピンチに駆けつけたようだ。

「まったく……ショッカーかと来て見れば、お前らか」

そこに、少年達に遅れて土がやってきた。

「あの人は?」

「あのおじちゃんは大丈夫だよ」

どうやら土は味方認定されているようだ。

「何でてめえは大丈夫なんだよ」

「その台詞は鏡を見てから言え。見た目赤鬼」

「こんの野郎……!」(見た目赤鬼)

モモタロスは一触即発の雰囲気だ。

『いいから渡せ!』

「うおっ!」

痺れを切らしたのか、アंकがモモタロスの手を払い退けてノッコに向かっていく。

「きゃっ!」

ノッコはアंकにぶつかって転び、思わずメダルを落とす。

「メダルが!」

メダルは転がっていき、黒い足にぶつかる。

「イーツ?」

全身黒タイツのショッカー戦闘員がメダルを拾う。

『それは俺のだ。よこせ』

「イーツ?……イーツ!」

『ぐあっ!』

アंकは戦闘員に殴られ、再びモモタロスのところへ戻っていく。

「へっ、殴られてやんのバーカ」

『うるさい!』

すると、向こうから他の戦闘員達と黒い軍服をきた男が1人歩いて来た。

「……まずいぞ、幸太郎。彼はブラック將軍だ」

「イーツ」

戦闘員はブラック將軍にメダルを渡す。

「おお、これは間違いなく首領が探していたメダルだ」

メダルを見ながらブラック將軍は呟く。

「そのメダル、返して貰うぜ」

「絶対にお前達に渡さない!」

士と幸太郎が子供達の前に出て、ブラック將軍と対峙する。

「ほっ、ならばどっする」

「こっするのさ」

幸太郎は取り出したベルトを腰に装着し、パスを握る。

「変身ッ」

『Strike Form』

パスをベルトに翳すと、幸太郎は仮面ライダーNEW電王へと変身する。

「「「!?」」」

その姿に子供達も驚く。

「今更驚いてんじゃない。こいつも仮面ライダーなんだよ」

「まっ、そういうことだ。変身ッ!」

『kamen rider Decade』

幸太郎に続き、士も変身する。

「君達は早く逃げるんだ!」

「うん!」

NEW電王は子供達に避難するように促す。

「よっしゃ、いくぜいくぜいくぜーっ!」

モモタロスを先頭に、NEW電王とディケイドはブラック將軍に向かっていった。

「はあっ！」

「ぬうつ！」

NEW電王の攻撃を華麗な剣裁きで食い止めるブラック將軍。しかし、次第にNEW電王が押し始める。

「はっ！」

「ぐっ！しまった！」

NEW電王の攻撃が手をかすめ、ブラック將軍が持っていたメダルが弾かれる。

「！今だ！」

近くに隠れていたナオキが、落ちたメダルを拾う。

「それを持って逃げろ！」

「うん！」

「ナオキ、こっちだ！」

ナオキはメダルを持って、ミッルと共に走り出す。

「くっ、追え！逃がすな！」

ブラック將軍の指示により、戦闘員達が後を追おうとする。

「おっと、お前らの相手はこの俺だ」

しかし、その前にディケイドが立ち塞がる。

（ちっ……まあいい。既に他の怪人に報告してある）

ブラック將軍は誰にも気付かれないようにほくそ笑んだ。

「急げ！」

「うん！」

ミツルとナオキは、少しでもショッカーから遠ざかる為にただひたすら走っていた。

「そこのガキ、止まれ」

しかし、行く手を怪人誰に阻まれてしまった。

「くそっ……」

「イーッ！」

「!？」

気が付いた時には、既に後ろに戦闘員が回り込み、挟み撃ちの状態になってしまった。

「もう逃げられないぞ」

怪人達はじわじわと距離を積めて行く。
すると――

「「「「「おおーっ!」」」」」

少年仮面ライダー隊が自転車で戦闘員達に突っ込み、不意打ちをくらった戦闘員達は混乱に陥った。

「貴方達、こっちよ!」

その隙に、ノッコは2人を近くにあった工場の中へ誘導する。

「ありがとう、助かったよ」

「ううん。気にしないで」

中に入った3人は一安心していた。
しかし――

「ふんっ!」

バリバリッ

「うわっ！」

怪人が壁を突き破って入ってきた。

「メダルを渡せ」

「いやよ！誰があんたらなんかに！」

怪人の要求を頑なに拒むノツコ。

「このガキ！」

「きゃっ！」

「！危ない！」

ナオキがノツコを庇い、怪人の攻撃を受ける。

「ぐっ……！」

「大丈夫！？」

「ナオキ！」

ナオキの手の甲に傷つけられた深い切り傷から、血が流れ出ていた。

「渡せと言っている」

ナオキ達は怪人に背を向け、出口に向かって走り出した。

「無駄だ」

「イーツ！」

しかし、既に怪人達に回り込まれていた。

「こっちよ！」

ノッコが2人の手を引き、もう一方の出口に向かが……

「イーツ！」

「イーツ！」

やはり待ち伏せており、3人は囲まれてしまった。

「イーツ！」

「……もう無理だよ、降参しよっ！」

ノッコはナオキの肩を揺さぶりながら弱気な声で言う。

「……ま………ちゃ………だっ」

ナオキは小さい声で何かを呟く。

「……ナオキ？」

「最後まで諦めちゃ駄目だ！」

ナオキは2人に、自分にも言い聞かせるように、大きな声で叫ぶ。

「今諦めたら……きっと死ぬほど後悔するからっ!」

「ナオキ……」

ナオキは、以前映司が言っていた言葉で自分を奮い起たせた。

「ならば……死ねえ!」

怪人が手を振りかざす。ナオキは思わず目を瞑った。

「待てい!」

その時、外から2つの影が走ってきた。

「「とうっ!」」

「イーッ!」

「イーッ!」

掛け声と共に、2人はショッカーの戦闘員達を蹴散らしていく。その2人は、白い仮面^{マスク}に赤い瞳、黒い体に緑のボディ、そして赤いマフラ^{マフラ}を棚引かせていた。

「仮面ライダー！」

ノッコが嬉しそうな声でその名前を呼ぶ。

「よく頑張ってくれた」

敵を蹴散らした1号、2号が3人に近寄ってくる。

「後は俺達に任せろ」

そう言うと、1号、2号はショッカーの怪人に向かって走りだした。

「1号、2号は僕達の味方なの？」

「当たり前よ！仮面ライダーは正義の味方よ！」

「正義の味方……」

「はあっ！」

「イーッ！」

2号のパンチが戦闘員達を吹き飛ばす。

「イーッ」

「イイツ」

「ふっ！はっ！」

「「イイツ！」」

戦闘員達の反撃を華麗にかわし、1号は自らの攻撃を当てる。

「「はあっ！」」

「ぬおっ！」

「ぐはっ！」

そして1号、2号の同時攻撃により、怪人達は工場の外へ弾き出される。

「くそっ、調子に乗るな！」

後を追って外に来た1号、2号に向かって攻撃を仕掛ける怪人。

「ぬうっ！」

「甘い！」

その攻撃を2号が受け止め、その隙に1号がカウンターを入れる。

「ぐあっ！」

攻撃をくらった怪人は、もう一方の怪人が居るところまで吹き飛ば

された。

「よし！」

「おう！」

1号と2号は互いに頷くと、怪人に向かってジャンプした。

「ライダーキック！」

「ライダーパンチ！」

1号、2号の必殺技が怪人達に炸裂する。

これをくらった怪人達はなんとか立ち上がるも、そのまま倒れ爆発した。

「はああああ！」

「イーツ！」

ディケイドもようやく全ての戦闘員を倒したようだ。

「さて……モモタロス達は上手くやってるのか？」

一方モモタロス達は、NEW電王と共にブラック將軍を追いつめていた。

「諦める。お前に勝ち目は無い」

「……それはどうかな」

するとブラック將軍は、その姿をヒルカメレオンへと変えた。

「へっ、だからなんだってんだ！おらぁ！」

モモタロスが攻撃しようと近付くと、ヒルカメレオンはその姿を消した。

「何！？」

「何処へ行つた！？」

モモタロスとNEW電王は、互いに背を合わせ周りを警戒する。そして、辺りは静寂に包まれる。

「うわっ！」

「！幸太郎！」

突然衝撃がNEW電王に襲いかかる。

「くそ、出てこいこの野郎——ぐぁっ——」

「モモタロス！」

姿が見えない敵を前に、2人はなすすべも無いようだ。

「電王！」

そこへ、先程1号、2号に助けられたナオキ達がやってきた。

「バカ野郎！来るんじゃないやねえ！」

「来ちゃ駄目だ！」

必死に、3人に近付かないように言うモモタロスとNEW電王。

『おい、メダルはどうした？』

「ちゃんと持ってる」

そう言つてメダルを持って見せるナオキ。

「貰った！」

「あつ！」

その隙を逃さず、ヒルカメレオンはナオキの持っていたメダルを奪い取る。

「メダルは確かに頂いた。さらばだ！」

「あつ、待て！」

NEW電王の静止を聞かず、ヒルカメレオンはその場を去っていった。

「まずいぜ……」

「これじゃあ、元の木阿弥だ」

「おい、どうした！」

そこへディケイドも合流する。

「ああ、実はメダルがショッカーの手に……」

「それなら大丈夫だ」

「！1号、2号！」

すると、1号、2号が遅れて合流する。

「話は全て、ナオキ君から聞いた」

「本物のメダルは此处にある」

2号が取り出したのは、先程ヒルカメレオンに取られたはずのメダルだった。

「どうしてそれを！？」

「ヒルカメレオンが持っていたのは、発信機が付いた偽物だ」

「偽物？」

どうやらナオキはメダルを見せることで、ヒルカメレオンにわざと奪わせたようだ。

「成る程な。その発信機を追って行けば、ショッカーの本部が分かるってことか」

「ああ」

ディケイドの発言を肯定する1号。

「流石だな。でも、その前にこれを……」

NEW電王は2号からメダルを受け取り、宙に投げる。

「はっ！」

『あっ！お前なんてことを！』

NEW電王はメダルを撃ち抜いて破壊した。

「これで、ショッカーにメダルが渡ることとはなくなったな」

「よし、ショッカーを殲滅しに行くぞ！」

「おう！」

1号、2号と共に、仮面ライダー達はショッカーの本部を目指した。

裏の裏の裏

ミツルとナオキは湖の岸に立っていた。その近くにはデンライナーが停車している。

「でも、まさかショッカーの本部がこんなところにあつたなんて…」

そう。ショッカーの本部は、この湖の地下にあつたのである。多数では侵入が困難な為、そこへは1号、2号、ディケイド、NEW電王、モモタロスの5人で向かった。

「俺も行きたかつたなあ」

「しょうがないよ」

ミツルはそう言いながら、湖を眺めていた。

— 地下 —

「こつちだ」

ライダー達は発信機の反応を頼りに、地下の洞窟を歩いていた。

「あつたぞ。此処だ」

目の前には、明らかに人の手によって造られた扉があった。

「行くぞ」

1号と2号がゆっくりと扉を開ける。そして1号、2号に続いて中へ入って行くライダー達。

「此処が、ショッカーの本部……」

その中は洞窟の中のせいで薄暗く、首領が何時も居るであろう玉座の奥にはショッカーのエンブレムが飾られていた。

「……おかしい。もぬけの殻だ」

「おい……どうなってるんだよ」

NEW電王とモモタロスが口を開いた。

『よく来た。仮面ライダー諸君!』

突然聞こえてきた声に、思わず玉座の方へ振り返るライダー達。

「お前がショッカーの首領か!？」

目の前にいたのは、赤いマントに頭全体を覆う赤いマスクで顔を隠した、ショッカーの首領だった。

「まんまと騙されたな、仮面ライダー！」

「！ブラック將軍！」

横からブラック將軍が現れる。

「メダルを処分したつもりだろうが、本物は此处にある」

ブラック將軍は懷からメダルを取り出す。

「何！？」

「私が落としたメダルは、既に偽物だったのだ」

『そう。全ては、お前達仮面ライダーを一網打尽にする為の罠』

そう言うのと、首領は懷から1枚の金色のメダルを取り出す。

「それは！」

『現れよ、シヨッカーグリード！』

宙に投げられたシヨッカーメダルは、ブラック將軍の持っていたメダルを吸収し、やがて1体の怪人の姿へと変化した。

「シヨッカー！」

雄叫びを上げたその姿は、シヨッカーのシンボルでもある鷲の姿を模していた。

「それだけでは無い！出でよ、再生怪人諸君！」

ブラック將軍の掛け声と共に、過去に1号、2号が倒してきた怪人達がライダー達を取り囲む。

「協力者の手を借り復活した怪人を相手に何処までやれるか、見せて貰おう」

「協力者だと？」

ディケイドの疑問をよそに、ブラック將軍もヒルカメレオンへと姿を変え、戦闘体勢へと入る。

「へっ、要するに全員ぶっ飛ばしちまえばいいんだろ？」

「そういうこと」

「よし、行くぞ！」

「おう！」

そうして、ライダー達は怪人達へと向かって行った。

「はあっ！」

「おらぁ！」

「イイッ！」

NEW電王とモモタロスは、次々と戦闘員達を倒していく。

「ショッカー！」

「ん？うわっ！」

「幸太郎——ぐあっ！」

すると2人に向かってショッカーグリードが飛行しながら突っ込んでいく。

「ショッカー！」

地上に降りたショッカーグリードは、翼を羽ばたかせ、羽を散弾のようにして2人へ飛ばす。

「ぐっ、くそっ！」

『attack ride blast』

しかし、羽はモモタロス達に当たる前にディケイドによって撃ち落とされた。

「お前……」

「しっかりしろ！」

『attack ride illusion』

デイクイドは3人に増え、それぞれ拳、剣、銃を構えてショツカーグリードへ向かっていった。

「はっ！」

「ゲソーツ！」

「でりゃっ！」

「ガラアーツ！」

1号と2号は次々と怪人を倒していく。1度倒した相手に2度負けるほど、仮面ライダーは甘くないようだ。

周りにいた全ての怪人を倒すと、2人は首領と相對する。

「正体を見てやる！」

『させん！』

首領はマントの中から火の玉を飛ばす。それを2人は転がりながらかわし、2号はジャンプして首領のマスクを剥ぎ取る。

『ちっ、ふんっ！』

「ぐあっ！」

着地した2号は首領に蹴られ、1号の下へ飛ばされるが直ぐに立ち上がる。

『仮面ライダー……とうとう私の正体を見たな』

その顔には無数の蛇が巻き付き、中心に大きな赤い目玉がひとつ付いていた。

『だが、私の正体を見た者は死ぬのだ！』

そして首領は先程よりも多くの火の玉を1号、2号に向けて飛ばす。

「ぬうっ！」

「ぐはっ！」

その圧倒的な火力に、1号、2号はなす術もなく倒れる。

「ショットカー！」

「ぐあっ！」

ショットカーグリードの攻撃により、ディケイドの分身は消えてしまった。

「くっ、なんてパワーだ！」

「これが、シヨッカーグリードの力ってやつか……」

その力の前に手が出せないディケイド達。

「へっ、グリードがなんだ。俺は最初から最後までグレートだぜ？
行くぜ！おらあっ！」

モモタロスが切りかかるが、かわされ、そのまま首もとを掴まれる。

「モモタロス！はあっ！」

NEW電王が助けに入るが、剣を受け止められ、同じように首もとを掴まれる。

「シヨッカー！」

そして、シヨッカーグリードは2人を掴んだまま洞窟の外に向かって飛んでいった。

「あっ、待て！」

ディケイドは慌ててその後を追う。

「ふんっ！」

「うわっ！」

「ぬおっ！」

洞窟の外までやってきたシヨッカーグリードは、2人を地面へ投げ出す。

「！？電王！」

湖を見ていたナオキ達は、急に現れたNEW電王を見て驚きの声を上げる。

「はああっ！」

「うわあああっ！」

シヨッカーグリードの羽の散弾をくらったNEW電王は、その衝撃で変身が解けてしまった。

「幸太郎！」

「お兄ちゃん！」

モモタロスとナオキ、ミッルが幸太郎に近付いて来る。

「シヨッカー！」

シヨッカーグリードの声を聞いて、湖からバズーカを背負った亀の

怪人——カメバズーカ——が現れた。

「メーガーッ！」

するとカメバズーカは、背中のバズーカでデンライナーに向かって砲撃を始めた。

——デンライナー車内——

「オーナー、攻撃されとるで！」

既に、デンライナーの至るところから火花が散っていた。

「このままでは、デンライナーが危険です。発車するしかありません！」

オーナーは壁に掴まりながら答える。

「えっ！？でも先輩達がまだ！」

「やむを得ません！」

カメバズーカから攻撃を受けているデンライナーは、ゆっくりと走り出した。

「皆、早く乗って！早く！」

出入口からナオミが顔を出し、外にいるモモタロス達に向かって呼びかける。

「お前ら、行くぞ！」

モモタロス達はデンライナーに向かって走り出す。

「おっと、先へは行かせないぞ」

しかし、その前にショッカーグリードが立ち塞がる。

「ちっ！」

「まとめて始末してやる。はあっ！」

ショッカーグリードの散弾攻撃が再び襲いかかる。

「危ない——があっ！」

ショッカーグリードを追ってきた1号と2号がモモタロス達の盾となり、攻撃をまともにくらう。

「1号、2号！」

2人はそのままモモタロス達の方へ吹き飛ばされる。

「ライダー！」

1号、2号の下へ駆け寄るナオキ。

「き、君達は早く逃げるんだ」

1号はよろめきながら立ち上がる。

「あの野郎っ！」

「待て！」

モモタロスがショツカーグリードに向かって行くこととするのを2号が止める。

「ショツカーグリードは俺達が倒す！行くぞ！」

「おう！」

「1号！2号！」

1号、2号はショツカーグリードに向かって行く。そして、ショツカーグリードに掴みかかり、その動きを止める。

「今の内に、早く！ナオキ君達を頼む！」

「1号……わかった！」

幸太郎達は子供達を連れてデンライナーへ走った。

「メガ？メガーツ！」

すると、カメバズーカは標的をデンライナーから幸太郎達へと移す。

「ぐっ！」

吹き荒れる爆風のせいで、思うように進めない幸太郎達。

「メガーツ！」

「はあっ！」

「メガツ！？」

カメバズーカが何者かに攻撃され、砲撃が止む。

「ディケイド！」

それは、シヨツカーグリードを追ってきたディケイドだった。

「お前ら、あの亀は任せて早く行け！」

「でも！」

「心配するな。はあああっ！」

そう言うと、ディケイドはカメバズーカに向かって行く。

「皆、急ぐんだ！」

幸太郎の声で、一斉にデンライナーに向けて走り出す。

「ほら、早くしろ!」

デンライナーに着いたモモタロスは先に乗り込み、後から来る子供達を抱え上げて中に入れる。

「ふう、なんとか間に合ったな……」

「……!ライダーは!?!」

ナオキの言葉に、皆が一斉に外を見る。そこに見えたのは――

『ぬわあっ!』

『ぐはっ!』

ショッカーグリッドに一方的にやられる1号、2号の姿だった。

『ぐっ!……私達は、決して悪には屈しない!』

『例えどんなにやられようとも、正義は必ず勝つ!』

「ライダー……」

『ならば貴様らを、悪の前にひざまつかせてやる!はあっ!』

『があっ!』

形勢は変わらず、ライダー達はなす術もなくやられていく。
その光景を、幸太郎達はただただ見ていることしか出来なかった。

「……………、ライダーッ！」

遂に我慢出来なくなり、ナオキがデンライナーから飛び出す。

「ナオキ！」

「行つては駄目だっ！」

「オーナー！止めて！」

「止める！おっさん！」

幸太郎とモモタロスはオーナーにデンライナーを止めるように言う。

「無理です！既にデンライナーは、爆発寸前です。もう制御が効きません！」

オーナーの言葉を肯定するように、デンライナーの至るところから火花が散り、煙が出る。

「ナオキ君！」

それを聞いて、ナオキを連れ戻そうと出口へ向かう幸太郎。

「待つんだ、幸太郎！」

「デディ！？」

「私が……ナオキ君を助ける！」

「！」

デディはそう言うと、幸太郎に代わってデンライナーから降りる。

「デディ！」

デディはそのまま、ナオキ君が走っていった方向へ向かっていった。

「デディ……デディーーッ！」

デンライナーは煙と火花を上げながら、空の彼方へ消えていった。

「……行っただか」

「メガーッ！」

『final attack ride D D D e
Decade』

砲撃を放ってきたカメバズーカに、ディケイドはディメンションブラストを撃つ。そのエネルギー弾は砲撃を飲み込み、そのままカメバズーカに当たる。

「メーガーツ！」

カメバズーカはその場に倒れ、爆発した。

「後は…… テディ！これを持っていけ！」

ディケイドはジークから受け取っていたカードをディディに向かって投げる。

「これは……？」

「それをナオキに渡すんだ。いいな？」

ディディは1度頷くと、再びナオキの方へ走っていった。

「さてと…… いい加減出てきたらどうだ？見ているんだろ？」

突然、ディケイドが誰も居なくなっただけの草むらに話し掛ける。
すると奥から、1人の男が出てきた。

「よくわかったな、ディケイド」

「偽物のメダル、再生怪人…… 話があまりにも出来すぎていたからな。それに、俺の邪魔をするのはどうせお前しか居ない。俺がデリラナーに乗ったら、それごと破壊するつもりだったんだろ？鳴滝」

男の正体はディケイドの宿敵、鳴滝だった。

「そこまではしない。私の目的は、お前をこの時代に取り残すこと」

「……俺をショッカーグリードにでも倒させるつもりだったのか？」

「いいや違う。奴には1号、2号を倒して貰う。そして、お前の相手は——」

話の途中で鳴滝の後ろから銀のオーロラが現れ、奥から人影がひとつ歩いてきた。

「……白い、クウガ？」

「お前の相手は、この”白き闇”が務める！」

現れた怪人は、色は違えどクウガのそれに酷似していた。

「お前はこの白き闇に、1号、2号はショッカーグリードに敗れ、特異点との接触手段を失ったお前はこの世から消えてなくなるのだ！」

そこまで言つと、鳴滝は銀のオーロラの中に消えていった。

「あつ、待て！」

ディケイドが追いかけてようとすると、白き闇が攻撃を仕掛けてきた。

「ぐっ、やはりこいつから倒さないと駄目らしいな」

ディケイドはライドブッカードで白き闇に切りかかる。しかし、それは片手で易々と受け止められてしまった。

「何!？」

「あははははは」

「ぐあっ！」

白き闇は再びディケイドに殴りかかる。ディケイドも受け止めようとしたが、その圧倒的なパワーにより吹き飛ばされてしまった。

「くそっ！ケータッチは……やはり使えないか」

他のライダーの力が失われている為、ディケイドはコンプリートフォームへと変身することが出来ない。

「どうしたの？もつと楽しませてよ」

「ぐはっ！」

「あははははははは」

「があっ！」

「あははははは」

「ごほっ！」

白き闇による一方的な暴力を前に、只流されるままに攻撃をくらい続けるディケイド。

「あはは………なんかつまらないなあ」

裏の裏の裏（後書き）

”白き闇”さんの性格や口調が変かもしれませんが、ご了承ください。
（オリキヤラではありませんよ）

そしてライダーもいなくなる(前書き)

今回はオリジナルはほとんどありません。

そしてライダーもいなくなる

——現代——

『ショッカーの世界征服を邪魔する愚かな人間ども、そして反逆者のライダーどもを殲滅するのだ!』

「「「「「イーツ!」「」「」」」」」

現代では、ショッカーによる人間狩りが始まっていた。

「うにゅー!」

「イーツ!」

「「えいつ!」「」

「イーツ!」

「笑いのツボ!」

「イツ!イーツイツイツイツイツ——」

比奈の子供達は大きな壁を境にして、第2アジトに侵入してくる戦闘員を撃退していた。

『クワガタ!カマキリ!バッタ!——ガータ ガータガタキリ—

バ　ガタキリバ』

「うおおおおおっ！」

「『イイツ！』」

壁の向こう側ではオーズ・ガタキリバコンボが何体にも分身して、戦闘員達を次々と倒していった。

フアアアアァン！

すると突然、上空で汽笛が鳴り響く。

「！デンライナーが！」

オーズが見たのは、至るところから火花が散り、今にも墜ちそうなデンライナーの姿だった。

「大変だッ！」

オーズは急いでベルトのメダルを差し替えた。

『タカ！クジャク！コンドル！——タージャードル！』

オーズはタジャドルコンボへとコンボチェンジした。

「はあっ！」

そしてタジャドルコンボの固有スキルにより、オーズは空高く飛翔する。

「おい！幸太郎！もう飛び降りるしかねえぞッ！」

出口付近に居たモタロスは、近くに居る幸太郎に言う。

「皆ーっ！」

そこへオーズが飛んできた。

「オーズ！ちょうど良かった！ミッル君を頼む！」

「わかった！」

オーズは幸太郎からミッルを受け取り、下降しようとした……次の瞬間――

ドオオオオオンッ！

「うわあああッ！」

デンライナーから爆発が起こり、幸太郎とアंकが投げ出され、オーズも爆風に巻き込まれた。

「うわっ！ぐうっ！」

オーズは自分を下にする事でミツルを守った。しかし、変身は解けてしまいベルトは放り出される。

「わああああっ！」

幸太郎は幸いにも木の上に落ちたことで衝撃を和らげたが、こちらもベルトを手放してしまった。

「いててて……ミツル君、大丈夫？」

「うん………あっ！」

上空では、空中分解をしたデンライナーがそのまま跡形もなく爆発した。

「デンライナーが……」

「オーナー……ナオミ……」

『小僧！亀！熊公！くそお、なんてこった………ってあれ？』

モモタロスが自身の異変に気付く。

『俺、左腕だけになってるじゃねえか！』

『フッフッフ、いい格好だな』（右腕）

『何だと！？てめえ！』（左腕）

「……！幸太郎、歴史の修復は！？」

アング
モモタロス
右腕と左腕を他所に、映司は幸太郎に質問する。

「……失敗した」

「！そんな！」

「……それに、デンライナーが無いからやり直しも効かない」

幸太郎の言葉に、映司は絶望の淵に追いやられる。

「つまりは最後の手段を失ったという訳だな」

その言葉を聞いたのか、向こうからジェネラルシャドウが戦闘員を連れて歩いてきた。

「ジェネラルシャドウ！」

「……！ベルトをつ！」

「もう遅い」

ベルトの方を振り向くと、ジャーク將軍とアポロガイストが2人のベルトを拾い上げていた。

「終わりだ。引っ捕らえよ！」

「」「イーツ！」「」

「くっ、ミッル君だけでも逃がさないと！」

「モモタロス、頼む！」

『応よ！ミッル、こっちだ！』

「俺達は少しでも時間を稼ぐんだ！」

「分かった！」

映司と幸太郎が足止めをしている間に、モモタロスはミッルの襟元を掴んでアジトの方へ誘導する。

『これは返して貰うぞ』

「イーツ！？」

アंकはどさくさに紛れて、戦闘員に渡されていたオースのベルトを奪い取る。

『おらぁーーーー！』

「うわぁっ！」

モモタロスはミッルの服を掴み上げながら、アジトの皆が防衛戦を張っていた高い壁を飛び越える。

「ミッル！」

「ミッル君！」

「シゲル！比奈さん！」

『皆、逃げるぞ！』

モモタロスの言葉を合図に、皆一斉にアジトの奥へ走り出す。

ミッル達はひとまず安全そうな廃墟のビルの中に隠れ、一息ついていた。

「モモタロス、ナオキ達はどうなったの？」

『さあな、俺にもわからねえ』

すると突然、奥から足音が聞こえてきた。

『……お前は』

「デディって奴ならさっき見つけた」

奥から出てきたのは、憑依状態のアंकだった。

「着いてこい」

皆がアंकの後を追って外の中庭らしきところに出ると、そこには

剣の状態のテディが地面に突き刺さっていた。

『おお！テンドン！無事だったのか！』

しかし、モモタロスの声に返事をしないテディ。よく見るとその身体は、至るところが錆び付いていた。

『おいっ、嘘だろ！？テンドンッ！返事をしろッ！……くそおっつ、何でお前まで……』

モモタロスと皆が悲しみに暮れているなか、アंकはその剣を引き抜く。その時、アंकは地面に埋まっている固い物を見つけた。

「おい、下に何か埋まってるぞ」

「……！」

モモタロスとミッル達は急いで剣が刺さっていたところを掘り返す。するとそこから、お菓子が入っているようなアルミで出来た箱が出てきた。

「タイムカプセル？」

ミッルはその箱を開けると、中から少年仮面ライダー隊の制服とペンダント、そして1枚の手紙が出てきた。

「……！ナオキからだ！」

ミッルの言葉に皆が注目する。ミッルは、皆にも聞こえるように声に出して、ナオキからの手紙を読み上げる。

「40年後のミッルへ。あの後――」

――あの後結局、1号、2号はショッカーグリードに敗れ、僕と少年仮面ライダー隊は追われる身となってしまった。

テディも僕らを守ってくれたんだけど、深い傷を負って、僕に1枚のカードを託して、そのまま……………

やっこの思いで僕は、40年後にアジトになるところを見つけて、身を隠す為に少年仮面ライダー隊の制服をタイムカプセルを埋めたんだ。

僕達が――

――僕達がっ……………伝えたいっ、想いはっ……………ただ1つつ……………」

ミッルはぼろぼろと涙を流しながら手紙を読み上げる。周りも手紙の内容を聞いて涙を拭う。

刹那、ミッル達の周りに銃撃が放たれた。

「！」

『な、なんだ！』

向こうから現れたのは、先程撒いたショッカーの戦闘員だった。

『こうなったら仕方ねえ！』

「なっ！」

モモタロスは、アंकが憑依している身体に憑依する。

「俺、参上！」

アंकの髪に一筋の赤いラインが入り、オールバックとなった。

『おい！この身体は俺のだ！返せ！』

「うるせえうるせえうるせえ！」

どうやら主導権はモモタロスにあるようだ。

「ミッル！こいつを持って逃げろ！」

「うん！」

「皆、こっちに！」

モモタロスはベルトをミッルに託し、剣を持って戦闘員達に立ち向かう。

「てめえら……ひとり残らずたたき切つてやる！おらあつ！」

襲い掛かってくる戦闘員を切りふせていくモモタロス。

「「「「「イイツ！」「」「」」」」」

「があああああつ！」

しかし、その圧倒的な数の前に為す術もなくやられてしまった。

捕らえられた映司、幸太郎、モモタロス（&アंक）は上半身を口
ープで縛られ、怪人達に引かれていた。

「酷い……」

遠くで隠れながらその様子を見ていた比奈の口から、思わず言葉が
漏れる。

「……俺、このベルトを絶対に届けて見せる」

ミツルのその言葉に、周りにいた他の子供達が力強く頷いた。

カルテット・心の声を聞け

都内の広場は今、たくさんの人で溢れかえっていた。人々が見ているのは十字架に張り付けられている幸太郎、映司、アंक、そしてそれを囲むように立っているショッカーの幹部と怪人達だ。

『なんだ？』

『何事だ？』

観衆はざわつきながら、その様子を見ていた。

「ぐっ！ぬっ！」

映司達は必死で抜け出そうとしているが、両手足が頑丈に固定されている為外れない。

「……幸太郎、……テンドンのことだけだよお……」

モモタロスが言いにくそうに、幸太郎に真実を伝えようと口を開く。

「……………わかってる」

「え？」

「……何があるつと、俺とあいつの絆は切れない。今までも……これからもずっと……」

「幸太郎……」

そして時が来たのか、ジェネラルシャドウが口を開く。

「愚かな人間どもよ、よく聞け！貴様らが最後の希望と称する仮面ライダーは、これにて完全に消滅するッ！」

『なんだって！？』

『どういうことだ！』

『止める！』

ジェネラルシャドウの言葉に、観衆が一斉に騒ぎ出した。

その時その後ろでは、白いシャツに赤いネクタイを着た子供達が集まっていた。

(……やるぞ)

(((応っ)))

手を合わせた子供達はそれぞれ四方に散らばった。

「構えよ！」

「『『『『『イーツ！』』』』』」

合図と共に、戦闘員達が映司達に銃口を向ける。

「……………」

広場の物陰には、ベルトを持った子供が様子を伺っていた。

「…………現れたな、ネズミが。」トランプショット」！」

それを察知したジェネラルシャドウは、子供が隠れている物陰に攻撃した。

「うわぁっ！」

辺りに火花が散り、子供は思わず転んでベルトを離す。

するとすかさず、観衆の中からまた1人子供が出てきてベルトを拾う。

「あの子は！？」

「俺達は、少年仮面ライダー隊だッ！」

『なんだ！？』

『少年仮面ライダー隊だって！？』

子供が声を大きくして名乗りあげると、また辺りがざわつき始める。

「捕らえよ！」

「「「イーツ！」「」「」

ジェネラルシャドウの合図で、戦闘員がその子供に襲い掛かる。

「このっ！」

「イイーツ！」

「くそっ！シゲル！」

戦闘員に捕まってしまった子供は、観衆の居る方へベルトを投げる。

「任せろ！」

人混みの中からまた1人子供が出てきて、ベルトを受け取り、再び人混みの中に消える。

「イーツ！」

戦闘員もその後を追って人混みに入る。

『ベルトよー！』

『仮面ライダーのベルトだ！』

やがて、1人の子供がまた人混みから出てくる。

「ミッル君！？」

ミッルは戦闘員をかわし、映司まであと数メートルというところまで来た。

しかし――

「ショッカー！」

「!？」

空より飛翔してきたショッカーグリードに行く手を阻まれる。

「くそっ！うわっ！」

「捕まえたぞ」

「は、離せ！」

ショッカーグリードによつて捕らえられてしまったミッル。必死に振り払うがびくともしない。

「フッフッフ、これで終わりだな」

不敵に笑うショッカーグリード。

「待てい！」

「!？」

しかし、その言葉は叫び声によつて掻き消された。

「「とっつ！」」

掛け声と共に跳んで現れたのは、洗脳されてショッカーの怪人と化

している1号、2号だった。

「1号、2号……」

「ここは俺達に任せろ」

「では見せて貰おう。ショッカー最強の怪人が、如何にしてそのガキを始末するのかを」

ジェネラルシャドウの笑い声が辺りに響く。

「仮面ライダーッ！」

そんな中、ミツルが1号と2号に向かって叫ぶ。

「ナオキからのメッセージを聞いて！」

「……」

1号、2号は無言のままミツルを見つめる。

「僕達が、未来に伝えたい想いはただ1つ」！

ミツルは息を荒くしながら続ける。

「仮面ライダーは、正義の味方」！

感極まって涙が流れ始めるミツル。

「俺もそう信じてるよ！」仮面ライダー”ッ！”

「「……」」

ミツルの言葉を、最後まで無言で聞き続けた1号と2号。

「馬鹿め。どんな悪でも勝てば正義だ！オーズと電王を処刑し、シヨッカーが正義となるのだ！」

シヨッカーグリードが声高らかに宣言する。

「「……ふはははは。はははははは！」」

それに対し、1号、2号は突然笑い出した。

「何？何のつもりだ？」

「シヨッカーに、正義などあるものかッ！」

「この世の悪は、全て俺達が砕くッ！」

その言葉に、怪人達だけでなく、観衆やモモタロス達でさえも呆気に取られた。

「貴様ら……裏切るつもりか？」

シヨツカーグリードが声を低くして問う。

「私達は始めから、シヨツカーに忠誠など誓ってはいない！」

「仮面ライダーを愛する者の想いを、甘く見ていたな。心あるシヨツカーの科学者が、俺達の洗脳を解いてくれたのだ！」

「何！？」

「私達は洗脳されている振りをして、貴様が現れるのを待っていたッ！」

「じつと悪の汚名に、耐えがらなッ！」

ワアアアアアアア！！！！

1号、2号の言葉に観衆が沸き立つ。

『いいぞ、ライダー！』

『頑張つて！』

その様子を見て、ミツルの顔から笑みが零れる。

「ええい！黙れッ！」

ショッカーグリードの言葉は届かず、辺りは一層歓喜の声に包まれる。

「行くぞ！」

「応！」

観衆の声を背に、1号と2号は怪人達に向かっていく。

「てりゃあっ！」

「はあっ！」

「イーツ！」

1号と2号は怒濤の勢いで戦闘員達を尻ぎ払う。

「はあああっ！」

「ぐっ！」

2人の同時攻撃がショッカーグリードに当たり、ミッルから手を放す。

「早く逃げるんだ！」

「うんっ！」

ミツルはベルトを持って逃げる。

「させるか！ベルトをよこせ！」

しかし、怪人の１人に捕まってしまった。

「ライダーに、届けて！」

ミツルは自らの想いを込めて、大衆が居る方へベルトを投げる。

「よこせ！」

他の怪人の１人がベルトが落ちた方へ向かっていく。

そして、地面に落ちていたベルトを拾おうとした寸前、誰かに横からベルトを奪われる。

「何！？」

「ライダーに届けて！」

ベルトを拾った女性は、また別の大衆が居る方へ投げた。

「このっ……！」

『行かせるか！』

『皆！やっちまえ！』

「ぬおっ！？」

周りにいた観衆が怪人達を取り囲む。

『皆、仮面ライダーを助けるんだ!』

オオオオオオオオ!!!

先程の女性の行動を皮切りに、大衆が怪人達の居る方へ走り出した。

±――

(……なんだ……?)

±――

(……この声は……)

起きるんだ、±――

(俺は……この声を……知っている……?)

ピッ

「うわっ!」

『ははは。相変わらずナマコが苦手なようだね』

ナマコを顔に当てられ、飛び起きる士。

「此処は……」

士が目覚めた場所は、塵ひとつ無い、一面真っ白な空間だった。

『こつちだよ、士』

声の聞こえた方を見ると、そこには1人の男が立っていた。逆光のせいか、顔はよく見えない。

「……あんたは一体——」

——諦めたら、そこが終点だ——

——こんなことで分かり合えないなんて、悲し過ぎるから——

士の言葉が、誰かの声によって遮られる。

「これは……」

——未来は変えられなくても、自分の明日は変えられるはず——

——どうやら切り札は、常に俺のところに来るようだぜ——

『これは、ライダー達の声だよ』

「ライダー達の？」

『ああ』

男は話を続ける。

『此処に居ると、色々な声が聞けるんだ。ライダー達に限らず、その周りの声もね』

——お前は、人間達の中で生き続ける——

——自分が変われば世界も変わる……それが天の道——

「どういうことだ？ライダーは消えたんじゃない……」

『人の想いがある限り、ライダーは消えない。それを証拠に、ほら——』

——仮面ライダーは正義の味方！——

——仮面ライダーを助けるんだ！——

「ミッル！それに……」

聞こえたのは、ミッル、そして大勢の人のライダーを望む声だった。それを聞いた士は、無言でその場に立ち上がる。

『行くのかい？』

「ああ。此処は、俺の来るべき世界じゃ無いみたいだからな」

『そうか……』

そう言うと、士は男に背を向け歩き出した。

『そうそう。愛用してくれるのは嬉しいんだけど……僕が渡した力メラ、次は壊さないようにしてくれよ』

「！あんた、まさか——」

士が振り返ろうとした瞬間、辺りが眩いばかりの光に包まれた。

『f i n a l k a m e n r i d e r D e c a d e』

突然聞こえた電子音に白き闇が振り返ると、そこには先程まで死に体だったはずのディケイドが、コンプリートフォームとなって立っていた。

「へえ、まだ動けたんだ」

そう言うと、白き闇はディケイドに再び殴り掛かる。

ガシッ！

「！？」

しかし、ディケイドはそれを片手で受けとめた。

「……………っふふふふ、あはははははははははは！」

それを見た白き闇は、ショックを受けるところか嬉しそうに笑い出した。

「そうだよ、それだよ。もっと強くなって、もっと僕を笑顔にしてくれよ」

そうして再び白き闇はディケイドにパンチを繰り出す。それを左腕でガードし、今度はディケイドが攻撃する。

その応酬は、さっきまでのがまるで嘘のように、ほぼ互角の戦いとなっていた。

「あはははは、あはははははははははは！」

殴られても尚、白き闇は笑うのを止めない。それどころか、どんどん殴る力が強くなっていく。

「……………悪いが、お前の遊戯^{ゲゲル}に付き合っている暇は無い」

『K u u g a k a m e n r i d e r U l t i m a t e』

一旦距離を置いたディケイドは、ケータッチのボタンを押す。するとディケイドの呼び掛けに応じ、クウガ・アルティメットフォームが姿を現す。

『f i n a l a t t a c k r i d e K K K K u u g a』

「はああああああつ！」

「あははははは、はあーーーーっ！」

片腕に炎を灯したディケイドとクウガ、白き闇は同時に攻撃を放った。

一瞬の静寂が、その場を支配する。

白き闇の放った狂気の一撃は、ディケイドとクウガの間を抜けて空を切る。

ディケイドの放った打倒の一撃は相手の胸元に、クウガの放った救済の一撃は腰のベルトに入っていた。

「がつ……はっ……」

白き闇は仰向けになりながら、その場に倒れた。クウガも、その役

目を終え姿を消した。

「……」

ディケイドは無言のまま、その場を後にしようと後ろを向く。

「……行くのかい？」

その時、白き闇がディケイドに話し掛ける。その身体には、既に胸とベルトの2箇所にくウガの刻印が浮き上がっていた。

「ああ。俺を……仮面ライダーを待っている奴らが居るんでな」

ディケイドは振り返らずに答えた。

「そうか………っははははは、あはははははははははは——」

白き闇は最後まで笑いながら、その場で爆発した。

カルテット・心の声を聞け（後書き）

補足説明

白い空間に居た男

オリキャラです。モデルは”仮面ライダーディケイド”OPの、土にカメラを渡して居た人。ディケイド最終話直後の映画噓（？）予告でもしかしたら語られたかもしれない、土の過去を知る人。登場はこれっきり。

世界の破壊者

「せーのっ、はい！」

比奈がシゲルとミツルを持ち上げると、2人は映司の両手足に着いた拘束具を外す。

「外れた！」

他のところでも、子供達が幸太郎、モモタロスの拘束を解く。

「皆、ありがとう！」

映司はミツル達にお礼を言つと、ショッカーに襲われている人のところへ向かった。

『これをライダーに！』

『ライダーに渡して！』

一方オーズのベルトは、巡り巡って白衣を着た眼鏡の男性に渡されていた。

『ライダー』

『ライダー！』

「仮面ライダーッ！」

映司は、自分と呼んだ男性の方へ振り向く。

「これを！」

男性は映司にベルトを投げる。受け取った映司はもう一度投げた方を見ると、その男性は力強く頷いていた。

「……うんっ！」

そして映司は、決意を込めた目でベルトを腰に装着した。

「変身ッ！」

『タカ！トラ！バッタ！——タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ』

オオオオオオオオオオオ！！！！

映司が仮面ライダー○○○へ変身すると同時に、^{オーズ}辺りが歓声に包まれた。

「行くぞ！はああっ！」

メダジャリバーを構えたオーズは、そのまま怪人達に向かっていった。

「このっ！」

「ぐっ、離せ！——うわっ！」

幸太郎は、ジャーク將軍からなんとかベルトを奪い返す。

『幸太郎、大丈夫か！？』

「ああ。テディが40年前で頑張ったのなら、俺は此処で頑張ってみせる。それが、俺とあいつの絆だ！」

幸太郎は、此処には居ないテディを思いながら言った。

「モモタロス、来い！」

『応よ！』

幸太郎は自身にモモタロスを憑依させた。

「俺、参上！」

オールバックになった幸太郎モモタロスが決め台詞を吐く。

「言いのかよ？幸太郎」

『今はあいつらを倒す。お前じゃ力不足だけだな』

「言ってくれるぜ！」

軽口を叩き合いながらベルトを巻く。

『「変身ッ！」』

『Strike Form』

電子音が鳴り響くとモモタロスは剣の姿に、そして幸太郎はNEW電王に変身する。

『言っておくが俺は——』

「最初からクライマックス、だろ？」

『そついうこつた。いくぜえいくぜえいくぜえ！』

NEW電王はモモタロスの言葉を合図に、怪人達に向かって走り出した。

「はぁっ!」

「イーッ!」

「とっ!」

「イーッ!」

1号と2号が怒濤の勢いで戦闘員達を倒していく。

「くそっ!調子に乗るなぁぁぁっ!」

「くぁっ!」

しかし、シヨッカーグリードの散弾攻撃により1号、2号は観衆の方へ吹き飛ばされる。

「シャドウ剣!はぁっ!」

「ぐわっ!」

「……ふんっ!」

「うわぁっ!」

ジェネラルシャドウのシャドウ剣とシャドームーンのシャドービームが炸裂し、オーズ、NEW電王も1号達のところへ転がっていく。

「フッフッフ、どうやらこれまでのようだな。皆殺したッ!構えよッ!」

「『『イーツ!』』」

『——ライダーを守れッ!』

『守るんだッ!』

満身創痍の状態の仮面ライダー達の前に、人々が次々と両手を広げて壁になっていく。

「たった4人だけでショッカーに齒向かおうとした、自分達の愚かさを憎むんだな」

『そいつはどうか?』

「何!?!」

ジエネラルシャドウの言葉を否定するように、何処からともなく声が聞こえてきた。

『仮面ライダーは4人だけじゃ無いぜ』

『Hyper Clock Over!』

電子音と共に現れたのは、過去の世界に取り残されたはずのディケイド・コンプリートフォームだった。

「士さん!？」

「ディケイド!」

『お前、一体どうやって!？』

「時を越えられるのは電王だけじゃ無い、ってことだな」

そう。ディケイドはカブト・ハイパーフォームの力を使い、時を越えてやってきたのだ。

「ディケイド!」

そんな中、ミツルが大声を上げる。

「このカードを……ナオキからの想いを、受け取ってッ!」

そう言うと、ミツルはディケイドに向かってカードを投げる。

「——これは……」

ディケイドが受け取ったカードには、既に絵が浮き上がっていた。

「おのれディケイドオオオオッ！」

そう叫んだのは、いつの間にかショッカーの怪人の中に紛れ混んでいた鳴滝だった。

「何故だッ！40年前に1号、2号はショッカーグリードに敗れ、仮面ライダーは歴史から消滅したはず！なのに……何故貴様が生きているッ！」

「それは、想いの力だ！」

「想いだと！？」

士は言葉を続ける。

「歴史とは思いが紡ぎだすもの。人々の思いがあるからこそ歴史は生まれ、そこから続いていく。お前のようにいくら歴史を改竄しようとも、人々の”仮面ライダーを愛する気持ち”が消えない限り、”仮面ライダーを望む気持ち”がある限り、俺達は何度でも蘇るッ！お前達の野望を阻止する為になッ！」

『k a m e n r i d e —— 』

士はディケイドライバーにカードを入れる。

「お前は……お前達は一体なんなんだアアアアッ！」

「俺は——いや、俺達は仮面ライダーだッ！よく、覚えておけッ！」

『All Rider!』

辺りに電子音が鳴り響くと、ディケイドの背後に銀色のオーロラが現れる。そして、奥から歩いてくる無数の人影が見えてきた。

「おおっ！あれはッ！」

オーロラの向こうから現れたのは、歴史の改変によって消滅したはずのライダー達だった。

「皆、行くぞッ！」

『『『『『応ッ！』『』『』『』』』』』』

「よし、俺達も行くぞ！」

「『『応ッ！』『』』」

「あっそうだ——皆さんありがとうございます！」

オーズは自分達を助けてくれた人達に感謝の言葉を述べる。そしてディケイドを先頭に、仮面ライダー達はショッカー怪人に向かって走り出した。

——同時刻——

「Happy birthday to you」

Happy birthday to you」

Happy birthday dear——」

とあるビルの一室で、1人の男性が歌を歌いながらケーキを作っていた。

「Happy birthday to you」

そして歌い終わると同時に、ケーキが完成する。

「素晴らしいッ！！今此処に、仮面ライダー達が再誕したッ！！こんなめでたい日に、我々が何もしない訳にはいくまいッ！！」

その男性があまりの興奮に大声を出していると、突然扉をノックする音が聞こえた。

「ナイスタイミングだ。入りたまえ！」

外に居た人物は扉を開け、部屋の中に入る。

「何か用ですか？」

「ああ。仕事だ、直ちに出勤したまえ伊達君！いや……」 仮面ライ

ダーバース”よっ!!”

男性が作ったケーキには、チョコプレートで”Happy
birthday”と書かれていた。

世界の破壊者（後書き）

次回からしばらくバトルだけになります。

Rの彼方にノ全てを振り切れ

「V3イイイ反転キイイック！」

『Sword vent』

「でりゃああっ！」

「ライダータイフーン脳天落としッ！」

『Slash thunder

—Lightning Slash—』

「ウエエエエイイッ！」

仮面ライダー達の怒濤の攻撃により、着実に数を減らしていくショッカー怪人。

『行くぜ！幸太郎！』

「ああ！」

NEW電王もモタロスと共に怪人を切り倒していく。

『おらあ！』

「はっ！」

「「イーッ！」」

左上から右下、右から左、左下から右上と、流れるように相手を切り伏せる。

「馬鹿め！後ろがから空きだ！」

「！しまった！」

『幸太郎！』

しかし、一瞬の隙をつかれて、背後に回るのを許してしまうNEW電王。すると突然――

「はあぁっ！」

「ぐわっ！」

何者かの手によって、怪人は蹴り飛ばされてしまった。

「うむ……この位の攻撃を避けられないとは、らしく無いぞ。幸太郎」

「お……お前……」

そこに立っていたのは、全身が青色の、鬼のような顔で、尚且つ優しそうな雰囲気醸し出しているイマジンだった。

「デディ！」

『テンドン!』

「40年ぶりだな、幸太郎」

そう。それは、40年前にショッカーに倒されたはずのテディだった。

「どうして!？」

「おそらく、ディケイドの力の余波で復活したのだろう」

ディケイドのカードに込められた想いが、テディを復活させたようだ。

『じゃあ、俺は行くぜ』

そう言うと、モモタロスは剣の形から人型に戻った。

「テディ」

「ああ!」

テディがモモタロスに代わって剣の姿に変わる。

「さてと——」

「先輩——っ!」

「桃の字!」

「モモタロスー！」

「——ん？」

モモタロスは聞き覚えのある声に振り返る。

「亀！熊！小僧！」

そこには、デンライナーの爆発と共に居なくなっただと思われた、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスが走ってきた。

「お前ら、無事だったのか！」

「うん。実はあの時——」

—

—

—

「うわぁっ！」

「いってて………此処は何処や？」

「ちょっとキンちゃん、いいから降りて！」

「此処は………写真館、ですかねえ？」

「さつきから騒がしいぞ、家臣ども。まあ、わざわざこの私に会いにくる忠誠心は、褒めてやっても——」

「どうやら助かったみたいやな」

「褒めて——」

「そうみたいだね。運よくこっちに飛ばされたみたいだし」

「褒め——」

「あれ？このドア開かないよ？」

「ん——」

「ああ、出口のデンライナーがなくなっちゃったからかな？」

「聞いておるのか！有ろうことが、この私を無視しおって！」

「あれ？ジーク居たの？」

「ええい！家臣ども！ご主人様の力を知るがいい！」

「ちょっと、ジーク暴れないで——」

——
——
——

「——ということがあって、それでデリライナーが復活したから
応援に駆けつけたって訳」

「な、なるほどな……」

「あと……はい。これ、オーナーから」

「？」

ウラタロスから手渡されたのは、ベルトとパスだった。

「へっ、真打ち登場ってわけか」

そう言うと、モモタロスはベルトを巻き付ける。

「変身ッ！」

『Sword Form』

電子音と共に、モモタロスは電王・ソードフォームへと変身する。

「俺、再び参」——

「行くぞ、家臣ども」

——う、って鳥野郎！台詞被せんな！」

「ほれ、届け物だ。ありがたく受け取れ」

「人の話を聞け！」

モモタロスはジークから届け物を受け取る。

「これは……、しょうがねえなあ。行くぞ、野郎ども！」

『Climax Form』

受け取ったケータロスを使いモモタロスは、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、ジークと共に電王・超クライマックスフォームへと変身する。

「イカーッ！」

「ガアラッ！」

すると向こうから、タイミングを計ったかのようにショッカーの怪人達がやってきた。

「よし、行くぜ！幸太郎！」

『Full Charge』

「ああ！」

『Full Charge』

電王とNEW電王の刀身がエネルギーに包まれ、光輝く。

「はあああああっ！」

2人は走りながら、向かってくる戦闘員達を2回、走り抜けた後に振り向きざまに怪人を1回ずつつ切り裂く。

「ゲソオーツ！」

「ガラアーツ！」

怪人達はその場に倒れ、爆発した。

「おのれライダーめ！」

「ここで全員始末してくれる！」

そう宣言したのは、ジェネラルシャドウと十面鬼ユム・キミル。それと対峙するのはディケイド、ストロンガー、アマゾンである。

「くらえ！」トランプカッター”！」

「させるかッ！」

『a t t a c k r i d e G a g a n o u d e w a』

「はあぁっ！」

ガガの腕輪を装備したディケイドが、飛んできたトランプを全て切

り裂く。

「何!？」

「驚くのはまだ早いぜ」

デイケイドはライドブッカーから1枚のカードを取り出す。

「ちよつとくすぐつたいぞ」

『final form rides S S Stronger』

デイケイドがストロンガーの背中に触れると、ストロンガーの身体が光に包まれる。そして、ストロンガーは巨大な赤いカブトムシ”ストロングゼクター”にファイナルフォームライドした。

「変形しただと!？」

「何だその姿は!」

「これが俺と……俺達の力だ!」

『final attack rides S S Stronger A A Amazon』

デイケイドに装着されていたガガの腕輪はアマゾンに装備され、ストロングゼクターは電気を帯び始めた。

『行くぜ!はあああああつ!』

「ぐあああつ！」

電気を帯びたストロングゼクターは、ドリルのように回転しながら
ジェネラルシャドウに突っ込む。

「スーパー大切断ッ！」

「ぬあああああつ！」

ギギの腕輪とガガの腕輪を装着したアマゾン、必殺技”スーパー
大切断”を十面鬼ユム・キミルに放つ。

「——デルザー軍団、万歳——っ！」

ジェネラルシャドウの断末魔を最後に、2人はその場に倒れ爆発し
た。

「ちいっ！」

「くそっ！」

「はははははっ！素晴らしい、素晴らしいぞッ！この力ッ！」

電王とNEW電王は現在アポロガイストに苦戦を強いられていた。

「私は全人類にとって、とても迷惑な存在になるのだッ！」

「畜生！どうなってやがるんだ！？」

『おそらく、やられた怪人達のエネルギーを吸収して、パワーアップしたのだろう』

電王達が怪人を倒した後にやってきたアポロガイストがパーフェクターを使い、怪人達のエネルギーを吸収してスーパーアポロガイストとなったのである。

「覚悟しろ！ライダーども！」

「くっ！」

スーパーアポロガイストが、自らの銃”アプロショット”を電王達に向かって放つ。

『attack ride blast』

しかし、第三者による妨害のせいで、それが電王達に当たることは無かった。

「何！？」

スーパーアポロガイストが驚愕していると、物影から1人のライダーが姿を現した。

「！てめえは前にパスを盗んだ、名前は確か……………ダイコン！」

「大樹だ！海東大樹。間違えないでくれるかな」

スーパーアポロガイストの攻撃を防いだのは、海東大樹こと”仮面ライダーディエンド”だった。

「何でてめえが此処に……」

「別に君達を助けに来た訳じゃ無い。ショッカーが作ったとされる伝説のメダル”ショッカーメダル”を手に入れに来ただけさ」

そう言つて、ディエンドはディエンドライダーにカードをセットする。

「ディエンド、貴様かあ……！」

「君の相手は彼がする」

ディエンドが銃の引き金を引くと、そこには仮面ライダーではなく、白いジャケットを着た1人の男性が現れた。

「何だ？あいつ……」

電王の疑問をよそに、その男性は懷からワインボトルを取り出した。

「今、僕のヴィンテージが芳醇の時を迎える……変身ッ！」

男性は、右手で大きくCを、ワインボトルを持った左手で を書き、腰に現れたベルトにワインボトルをセットする。すると全身がワインのような液体に包まれ、やがて1人の戦士が現れた。

「貴様……何者だッ！」

「僕は……」仮面ライダーG」！」

その姿は、黒い身体に赤く”G”と描かれたボディ、同じく目の周りに”G”マークをつけたマスクをしていた。

「行くぞ！」

Gはボディの”G”の部分に触れる。するとそこから”G”のマークをモチーフとした剣が現れる。

Gはその剣を持って、スーパーアポロガイストに向かっていく。

「はっ！」

「ぐうっ！」

Gの斬撃をアポロカッターで防ぐスーパーアポロガイスト。

「はぁあっ！」

「くっ！しまった！」

Gの巧みな剣捌きにより、スーパーアポロガイストはアポロカッターを弾かれた。

「ふっ！はぁっ！」

「ぐぁあっ！」

これを好機と見たGは透かさず攻撃を仕掛ける。スーパーアポロガイストはよろめきながら距離を取った。

しかしその隙を見逃さず、Gはベルトの左脇にあるボタンを押す。そしてベルトから出た赤いエネルギーが”G”の文字に伝わっていき、そしてそのエネルギーは再びベルトを経由して左足に集中する。

「スワリング・ライダーキック！」

Gは地面を蹴ってジャンプすると、左足をスーパーアポロガイストに向け、横回転をしながらキックを放った。

「はあああつ！」

「ぐあああああつ！」

攻撃を受けたスーパーアポロガイストは、そのまま爆発した。その炎の中には、”G”の文字が浮かび上がっていた。

「ふっ！はああつ！」

「イイッ！」

オーズはトラクローを使い、次々と戦闘員達を倒していく。

「おのれ！こうなれば一気に蹴散らしてくれる！集えッ！怪人達よ！」

ブラック將軍の声を聞いて、周りからアンノウン、ファンガイア、オルフェノク、グロンギ……果てはイマジンまで、続々と集まって来た。

「うわっ！何だこの数！？」

「ふはははは！仮面ライダーと言えど、これだけの数を相手には出来まい。皆の者、かかれッ！」

『『『オオオオオッ！』『』『』』

ブラック將軍の言葉を合図に、怪人達がオーズに向かって一斉に襲い掛かる。

『f i n a l f o r m r i d e R R R R y u k i H
H H H i b i k i 』

しかし、電子音と共にリュウキドレッサーとヒビキアカネタカによって周りの怪人達は一斉に蹴散らされた。

「危なかったな」

「士さん！」

オーズのピンチにディケイドが駆けつけたようだ。

「あのドラゴンと大きな鳥は一体……」

「あれは、俺とあいつらの力だ」

「え？」

final form of ride

「ちよつとくすぐった——いや、痛みは一瞬だ」

そう言うと、ディケイドはオース……ではなく、近くに居た怪人達の背中を叩く。すると、怪人の身体の中からそれぞれメダルが出てきた。

「成る程な、そういう力か……映司！受け取れ！」

ディケイドが拾ったメダルをオーズに渡す。

「これは……コアメダル！？ どうしてこれを！」

「それは気にするな。いいから使ってみろ」

「はい！分かりました！」

オーズは受け取ったメダルをベルトに入れ換え、オースキャナーでスキャンする。

「タカ！カンガルー！バツタ！」

オーズは亜種・タカガルバにコンボチェンジした。

「すごい……腕が軽い！」

オーズは、カンガルーアームの使い心地を確かめるようにシャドウボクシングをする。

「よしっ！うおおおおおおっ！」

カンガルーアームによるラッシュ攻撃で、次々と怪人達をKOしていくオーズ。

「おのれ！いい気になるのも今の内だッ！」

ブラック將軍はヒルカメレオンへと姿を変え、戦闘体制に入る。

「映司！これも使ってみろ！」

デイケイドは先程手に入れたもう1枚のメダルをオーズに渡す。

「また新しいメダル……今度はどんな力を秘めているんだ？」

オーズはベルトのカンガルーメダルの代わりに受け取ったメダルを入れ、カンガルーメダルをバッタメダルと入れ換えた。

「タカ！パンダ！カンガルー！」

オーズは亜種・タカパンガルへコンボチェンジする。

「腕にパワーが……それに、足も軽い……」

今度は足となったカンガルーレッグとパンダアームを見ながら呟くオーズ。

「オオオッ！」

「これなら——はあああっ！」

カンガルレーグのハイキック、ローキック、飛び蹴り、そしてパ
ンダクローによる投げ技、切り裂き攻撃と、多彩な技で残りの怪人
達を全て倒していった。

「ならば私が最後の相手だッ！」

そういうと、ヒルカメレオンは保護色でその姿を消す。

「！何処へ行った！？」

オーズが辺りをキョロキョロ見回していると、突然背後から攻撃を
受ける。

「うわっ！」

その後も、オーズに見えないのをいいことに、攻撃しては距離を取
り、攻撃しては距離を取りのヒット＆アウェイを繰り返していた。

「くそっ……どうすれば——」

「オーズ、頭だッ！頭を使えッ！」

「頭を使えって言っても……頭？」

ディケイドの言葉に何か引つ掛かったオーズ。

「頭……………！そうか！」

デイクイドの真意に気付いたオーズは、タカヘツドの力を使い、ヒルカメレオンを探す。

「何処だ？……………何処に居——そこだッ！」

オーズは右側から迫ってきていたヒルカメレオンを、パンダクローで捕らえる。

「何！？」

「もう逃がさないぞ！はあああッ！」

オーズはヒルカメレオンをそのまま頭上に持ち上げ、パンダアームでぐるぐると回す。

「はあッ！」

「ぬあああッ！」

そしてヒルカメレオンを真上へ投げ出す。

「はああああッ！セイヤーッ！」

そして落ちてきたヒルカメレオンに、カンガルーレッグの回し蹴りが炸裂した。

「ぐあああああッ！」

攻撃をくらったヒルカメレオンは地面を転がり、そのまま爆発した。

Rの彼方にノ全てを振り切れ（後書き）

補足説明

ストロングゼクター

姿はゼクターカブトに似ているが、足がバネで出来ていたり、背中に一本黒い筋が入っていたりと多少の誤差はある。（詳しくはHERO SAGA参照）

オーズのFFR

ぶっちゃけパンダやカンガルーを使いたいが為にやった。後悔はしていない。期待した方がいたらすいません。

仮面ライダーG

シェードの手で改造人間にされてしまった元ソムリエの”吾郎”が、正義に目覚め、シェードと敵対した”愛の為に戦う仮面ライダー”。

明日のメダルとパンツと掴む腕（前書き）

遅くなつてすいません。

明日のメダルとパンツと掴む腕

「ようやく追い詰めたぞッ！」

「40年前の雪辱、今こそ果たしてやるッ！」

1号、2号は街の外れの荒れ地でショッカーグリードと対峙していた。

「馬鹿め！返り討ちにしてくれる！」

ショッカーグリードはそう叫ぶと、2人に向かって走り出す。

「よしっ！」

「行くぞ！」

1号、2号もショッカーグリードに向かって走り出した。

「はあっ！」

「とっっ！」

「ふんっ！」

「はっ！」

相手の攻撃を受け流しては1号と2号が攻撃し、こちらの攻撃を止められてはショッカーグリードが反撃する。その攻防の様は、まさに一進一退だった。

「貴様ら……いつの間にこんなに強くなったのだ!？」

「仮面ライダーを信じる者が居る限り、私達はどこまでも強くなれるッ！」

「そして仮面ライダーが居る限り、お前達ショッカーの好きにはさせないッ！」

そして1号と2号のダブルパンチが決まり、よろめきながら後退するショッカーグリード。

「ぐっ……おのれえええええ！」

激昂したショッカーグリードは空中に飛翔する。

「最後に笑うのは、我々ショッカーだアアアアッ！」

そしてショッカーグリードは、そのまま2人に突進していく。

「いくぞッ！」

「応ッ！」

そう言うと、1号は右手の握りこぶしを腰に、左手は指を伸ばして

右上に向けて伸ばし、2号は両腕を直角に曲げて両手を握り、右手を左胸に、左腕を頭の横に持つていく。

そして2人は、ショッカーグリードに向かって跳び上がった。

「はあああああつ！」

「「ライダーアアアダブルキイイック！」」

突進してきたショッカーグリードにダブルライダーの必殺技が炸裂する。

「ぐああああッ！」

ショッカーグリードは吹き飛ばされ、そのまま地面に落下する。

「———シヨオオオツカアアアアッ！」

そして断末魔と共に、ショッカーグリードは爆散した。

『よし！コアメダルゲットだ！』

物陰に隠れていたアंकが、爆発によって宙に飛ばされたショッカーメダルに向かって飛んでいく。

「そうはいかないよ」

『何！？』

しかしそれは、横から割り込んできたディエンドに掠め取られてしまった。

『おいッ！そいつを渡せッ！』

「こういうのは早い者勝ちさ。じゃあね」

『a t t a c k r i d e i n v i s i b l e』

『あっ！待て！』

ディエンドはインビジブルのカードを使ってそのまま何処かへ消えてしまった。

一方他のライダー達は、街から離れた荒れ地でショッカー首領と死闘を繰り広げていた。

「「「「「おおおおおッ！」「」「」「」

『ふんっ！』

「「「「「ぐあああッ！」「」「」「」

一斉に向かっていくも、ショッカー首領のマントの内より放たれた
火炎弾攻撃により全て弾かれてしまった。

「くっ！十字手裏剣！」

「キングストーン・フラッシュ！」

「ボルテックシューター！」

「超変身ッ！」

『Strike vent』

『single mode』

『thunder』

『バツシャーマグナム！』

『attack ride blast』

『Luna！Trigger！』

ライダー達は負けじと一斉射撃を行う。

『無駄だと言っているのが分からないのかッ！はあッ！』

しかし、それさえも、ショッカー首領のたった一度の攻撃で全て相
殺されてしまった。

「馬鹿な!？」

『ははははッ!』

シヨッカー首領の笑い声と共に、シヨッカー首領の顔に巻き付いて
いる蛇が5匹、ライダー達に向かって首を伸ばし始めた。

「な、何だ!?!——うわっ!」

「離せ!このッ!」

蛇の首がライダー達に巻き付き、そのまま上へ持ち上げる。

『はああッ!』

「うわあああッ!」

「があッ!」

結構な持ち上げられたライダー達は、他のライダー達のところに向
かって叩きつけられた。

『はあああッ!』

そして追い討ちとばかりにシヨッカー首領は、蛇の頭から火炎弾を
飛ばす。その圧倒的な火力を前に、ライダー達は為す術もなく倒れ
た。

「ぐっ……一体どうすれば……」

るに移動する。

「ちよつとくすぐつたいぞ」

「ちよつ！お前また何かする気——いでっ！」

ディケイドが電王の背中を叩くと、電王の身体の中から、桃が描かれた1枚のメダルが出てきた。

「何か出たアーーーーッ！」

「モモ……モモタロス……イマジン……イマジンメダルってところだな」

そしてディケイドは、ライドブッカードからもう1枚カードを取り出す。

「海東！そのメダル、使わせてもらっぜ！」

final attack ride o o o o o

「！僕のお宝が！」

ディケイドの持っていたことがイマジンメダルとディエンドの持っていたシヨッカーメダルが、オーズのベルトに装填された。

「これは……？」

「映司！使ってみろ！それがお前と俺達の力だ！」

「土さん……………はいッ！」

ディケイドの言葉を聞いたオーズは、オースキャナーを手に取りメダルをスキャンした。

『タカ！イマジン！ショッカー！——ターマーシー タマシー
ターマシーー！ ライダアー—— タ・マ・シーッ！』

「おおっ！あれは……………！」

1号、2号、電王、ディケイド、そして他の全てのライダーの想いを背負って、オーズはタマシーコンボへと変身した。

『今更何をしても無駄だ！はあっ！』

ショッカー首領はオーズに向かって火炎弾を飛ばす。しかしオーズは、今までライダー達を退けてきたその攻撃に全く動じなかった。

『何！？』

そしてオーズは再びオースキャナーを取り、メダルを再度スキャンする。

『スキヤニングチャージ!』

「おおオオオオオ——」

オーズは腰を低くし、両手を左の腰の辺りに、手の平を向かい合わせるようにして構える。するとその手に包まれるように、球体のエネルギーが炎を纏って現れる。

「はああああつ!」

『ぐツ!』

やがてショッカーメダルの模様に変化したエネルギーを、ショッカー首領に向けて放つ。

「はあああああああ——」

エネルギーが纏っていた炎も、同じようにタカメダルとイマジンメダルの模様に変化させる。

「——セイヤアアアアアアツ!」

ショッカー首領に向かって放たれたタカメダルとイマジンメダルは、先に放たれていたショッカーメダルと重なることで膨大なエネルギーが解放され、大爆発を起こした。

『ぬぁアアアアアッ!』

シヨツカー首領はその爆発により、遙か彼方まで吹き飛ばされた。

「——っはぁはぁはぁはぁ……」

力を使い果たしたのか、オーズはその場に膝をつく。

「よくやった、映司」

「これで一件落着だな」

そんなオーズに、デイケイドと電王が駆け寄って労いの言葉を掛ける。それに遅れて、他のライダー達も近くに来る。

「皆……」

しかしその時——

「なっ何だ!?!」

突然地面が、まるで巨大な何かが動き出したかのように揺れ始めた。

「！皆ッ！あそこだッ！」

そう叫んだNEW電王の視線の先には、ショッカーと同盟を結んだGODの幹部”キングダーク”が立っていた。

「で、でかい……」

「あんなの反則だろッ！？どうやって倒せばいいんだよッ！」

『ハッハッハッ！終わりだ！ライダーども！』

キングダークはライダー達を見下ろしながら、声高々に叫ぶ。

すると今度は、キングダークとは別の、何か巨大な者が歩いて来るように地面が揺れ出す。

「おいおい……今度は何だってんだ……？」

電王が辺りをキョロキョロ見回していると、突然後ろから、”ドスンッ”と大きな地響きがした。

「今度は後ろかアアッ！」

「あれは……仮面ライダーJ！」

その足音の正体は、キングダークに対抗する為に精霊の力を借りて巨大化した”仮面ライダーJ・ジャンボフォーメーション”だった。

『笑わせてくれる！それで私と互角になったつもりかッ！』

そう叫ぶとキングダークはJに向かって歩き出す。Jも負けじとキングダークに向かっていく。

『はっ!』

『甘いわッ!ふんっ!』

『ぐッ!』

Jのパンチはキングダークに弾かれ、逆にキングダークから反撃を受ける。

『はああっ!』

『ぐあああッ!』

キングダークから渾身の一撃を貰い、Jは後方へ殴り飛ばされてしまった。

「やべえ……このままじゃやられちまうぞ!どうすりゃいいんだ!」

「だったら——こうすればいい」

そう言うとディケイドはまたカードを1枚取り出す。

「海東、ちよっとくすぐりたいぞ」

『final form ride D D D Diend』

「！土ッ何をする——」

ディケイドがディエンドの背中に触れると、ディエンドはファイナルフォームライドにより”ジャンボディエンドライバー”へと姿を変えた。

「J、受け取れ！」

そしてJは現れた”ジャンボディエンドライバー”を掴むと、”ディエンド・コンプリートフォーム・ジャンボフォーマーシオン”へと変身した。

『何だと！？』

突然姿の変わった相手を見て、驚きの声を上げるキングダーク。

『やれやれ。今回は特別大サービスだ』

『final attack ride D D D Diend』

ディエンドが銃口をキングダークに向けると、その直線上を囲うように無数のカード型のエネルギーが回転し出す。

『はあっ！』

そしてディエンドが引き金を引くと、ディエンドライバーから必殺技”ジャンボディメンションシュート”が放たれた。

『ぐああああッ！』

ディエンドに撃ち抜かれたキングダークは、その場に崩れ落ち、そのまま爆発した。

「よっしゃあッ！」

「これではショッカーの残党を倒すだけだな」

キングダークが倒れたことにより、一同は安堵する。
しかし――

「ッ！また揺れが！？」

「しかも、さっきよりも強いぞッ！」

再び地面が、さっきのJやキングダークの比ではない程に強く揺れ出した。

「あれは何だ！？」

オーズが指を指した方向にライダー達が一斉に振り向いた。するとそこからは、キングダークの何倍もの大きさを誇る巨体が地面を突き破って出てきていた。

「何なんだ、一体……」

やがて巨大な身体に覆い被さっていた土が全て落ち、その全貌が明らかとなった。身体の表面は岩石に覆われ、遙か上空にある顔は鬼のような形相、そしてそれに付いている赤い目は、ライダー達を見つめるように不気味に光っていた。

「あれは……ショッカー首領の真の姿”岩石大首領”！」

「岩石大首領！？」

すると、岩石大首領の力により空が暗黒に包まれた。そして大地は割れてマグマが吹き出し、空からは膨大な数の隕石が辺り一帯に降り注ぎ始めた。

「うわあああつ！」

「モモタロス！——があッ！」

その圧倒的な物量に、ライダー達は何も出来ずに倒れていった。

『ぐあああッ！』

先程キングダークを倒したディエンドも、隕石の直撃を受けて元の大きさに戻ってしまった。

「岩石大首領は、全てを破壊しつくすまで、絶対に止まらないッ！」

「世界はもうおしまいだぁッ！」

所々で悲鳴を上げながら、ショッカーの残党は、岩石大首領の開けた大地の裂け目からマグマの底へ落ちていった。

「くっ……どうすればいいんだ……」

両手を地面につきながら、なんとか立ち上がろうとするオーズ。

「オーズ！危ないッ！」

「！？」

オーズが空を見上げると、今までのものよりも一回り大きい隕石がオーズに向かって来ていた。

「うわぁぁあッ！」

思わず両腕で顔を覆うオーズ。

『セル・バースト』

しかし、その隕石はオーズに当たること無く、空中で破壊された。

「！今は！」

オーズは攻撃が放たれた方を向く。

「遅くなつたな。わりい」

「伊達さん！」

そこには、伊達明こと”仮面ライダーバース”が立っていた。するとエネルギーが切れたのか、隕石の落下は収まり始めた。仮面ライダー達はそれを機に、最後の力を振り絞って立ち上がる。

「仮面ライダーは、ショッカーを倒すまでは絶対に死なんツ！」

「そうだ。それに、俺達にはまだ仲間が居る。海東！これを使え！」

ディケイドは1枚のカードをディエンドに投げて渡す。

「これは……………やれやれ、君も人使いが荒いな」

『k a m e n r i d e A l l R i d e r !』

ディエンドがカードを使うと、バースの後ろに銀のオーロラが現れる。

「うおっ！何だ！？」

そしてオーロラの方こうから現れたのは、ある時は支え合い、ある時は敵対し、またある時は共に戦った、残り全ての仮面ライダー達だった。

「おおっ！皆、来てくれたのか！」

自分達の呼び掛けに応じてくれたことに感激する1号。

「今こそ、全ての仮面ライダーの力を合わせる時だ」

『final attack ride All R R R
ider!』

デイクイドが再びカードを使うと、その場に居る仮面ライダーの全てのバイクが光を纏って現れる。

「これは……」

ライダー達が自らのバイクに手を触れると、空に岩石大首領まで続く光の道が現れた。

「皆！行くぞッ！」

「……」
「……」
「……」
「……」

ライダー達はバイクに乗り、オーズを先頭に岩石大首領の元まで走り出す。

『オオオオオオオオオオオ』

岩石大首領は再び隕石を落とし始めたが、ライダー達はそれに構うことなく走り続ける。

「我々の40年の想い、受けてみよッ！」

ライダー達は、走りながら”40”の形に隊列を組む。

「オールライダーアアブレイエイクッ！！」

ライダー達のバイクは一層強い光に包まれ、そのまま岩石大首領に突進していった。

『オオオオオオオオオオ』

ライダー達に身体を貫かれた岩石大首領は、その場に崩れ落ちながら爆発した。

エピソード

《再びライダーが揃って戦う日まで、全ては君たちの力にかかっている》

《頑張るんだ、仮面ライダー！私達は、ずっと見守っているぞ！》

映司達は、先程までライダー達が居た方をじっと眺めていた。

「ライダー！」

「「「仮面ライダー！」」」

後ろを振り向くと、ミツルや子供達が走って来ていた。

「よし、これで一件落着だな！ハッハッハッ——」

モモタロスが映司の背中を叩きながら喋り出す。

「——ん？何か忘れているような……」

「……！ナオキだ！」

幸太郎の言葉に、一同は慌てだす。

「もう一度40年前に戻って、ナオキ君を連れ戻さねば」

「その必要はないよ、テディ」

すると、向こうから白衣を着た眼鏡の男性が歩いてきた。

「え？どうして私の名前を——」

「………父さん？」

テディの言葉に被さるようにミツルは声を絞り出した。

「………ミツル！」

その男性も、それに答えるようにミツルの名前を呼ぶ。

「……父さん、父さん！」

ミツルは男性に駆け寄って、今まで会えなかった寂しさを埋めるよ

うに抱きしめ合う。

ミツルを抱きしめる男性の手の甲には、一筋の古傷があった。

「その傷……あんたまさか！」

男性の傷は、ナオキがノッコを庇って受けたそれに酷似していた。

「そう。ナオキだよ」

「え!？」

その男性——ナオキ——の言葉に、一同は啞然とする。

「ちょっと待てよ。過去に飛んだナオキの息子が、ミツルだったのか!？」

「ああ。驚かせてすまない」

モモタロスの言葉を肯定するナオキ。

「……父さんが、あのナオキなの？」

「うん」

そしてナオキが語り出した。

「ミツルも、皆も聞いてくれ。僕は40年前に残ったことで辛い目にもあったけど、ノッコと結ばれ、ミツルを授かり、ショッカーの科学者として1号と2号の洗脳を解き、それも全てかけがえのない時間となった」

そしてナオキ一息置いて続ける。

「だから僕は、このままでいい」

ナオキは力を込めた目でそう言った。

「ナオキもまた、ライダーの歴史の一部になった、という訳か」

「彼もまた仮面ライダーを信じる者。うん、素晴らしいお宝だ」

「……あつ！そういうえば！土君今まで何処に居たんですか！？こっちは大変だったんですよ！」

士達がワイワイ騒ぎだす。

「まあ、僕は目的の物は手に入っだし、何でも構わないけどね」

「お前、いつの間に……」

「あつ！おい、そいつを寄越せ！」

海東が取り出したメダルを見て、呆れる土と未だに文句を言うアンク。

すると、2枚のメダルは光の粒となって消えてしまった。

「僕のお宝が！」

「おそらく、役目を終えて消えたんだろ」

「ちっ！散々苦勞して結局無駄働きだったか」

「元はといえばお前が原因だろ！」

「ああん？」

「やんのかコラア！」

言い争うアंकとモモタロスをやそに話を続ける。

「僕は仮面ライダーを信じてきて良かった。そして、そのバトンは君たちに渡された。今度は、君たちの手でバトンを渡して欲しい。次の世代へ」

「重そうなバトンだけどね」

「まあ俺は、新たな旅で新たなライダー達に伝えるさ」

「俺もとりあえず、今を一生懸命戦います」

「それでいい」

ナオキは満足そうにうなずいた。

フアアアアアン！

すると、空にデンライナーの汽笛が鳴り響く。

「出発の時間だ。俺達の時間はもう始まってる」

「また会えるといいな、俺達」

「会えるさ。新しい旅路で」

そう言う土は、手の平を下にして前に出す。

「未来で」

幸太郎もそれに見習い、自分の手を土の手の上に乗せる。

「……俺達の新しい明日で！」

映司も自らの想いを込めて、2人に手を合わせた。

「……………ほらよ」

その雰囲気感に感化されたのか、アंकに手を差し伸べる。

「……………」

しかしアंकは、我関せずといった感じでそっぽを向く。

「てめえ……、最初から最後までクライマックスで嫌な野郎だな！」

「落ち着けモモタロス！」

「離せ！テンドンッ！」

フアアアアン！

その喧騒は、デンライナーが来るまで続いた。

デンライナーが土達の脇に停車すると、中から1人の老人が出てきた。

「居た居た。おーい！土くーん！」

「おじいちゃん！？」

その人物は、先程までずっと土のカメラを修理していた栄二郎だった。

「修理が終わって出てきたら、誰も居ないんだもん。びっくりしちゃったよ」

「……おじいちゃん、もしかして気が付かなかったんですか？」

「え？何が？」

どうやら仕事に熱中していたあまり、今回起きた事件も気付かなかったようだ。

「おや？どうしたんだい？こんなに集まって——あっ！そうだ！」

何か思い付いたように手をポンツと叩く栄二郎。

「これから修理したカメラの試し撮りをしないといけないんだけど、皆さんどうですか？記念に1枚」

栄二郎は皆に提案する。

「いいですねえ。今日という、かけがえの無い日の思い出を残すのも」

そう言いながら、デンライナーからオーナーが出てきた。

「さあ、時間は有限です。皆さん並んで下さい」

「わーい、格好良く撮ってねー！」

「ちょっとキンちゃん、狭いって」

「しゃーないやろ！」

「家臣ども、苦しゅうない」

「てめえはもう少し詰めやがれ！」

「ほら、アंक。スマイルスマイル」

「……ふんっ！」

「綺麗に取ってくれたまえよ」

「なんだが、土君が撮られる側に居るのも珍しいですね」

「まあな」

「父さん、こっちこっち」

「ああ、分かったよ。ミッル」

「それじゃあ撮りますよー」

ジーーーーー

「はいチーズ！」

カ
シ
ャ
ッ
！

エピソード（後書き）

「ただいまー……ってあれ？皆どうしたの？そんな疲れたような顔して……」

「ああ、やっと帰ってきたか。仮面ライダークウキ」

「おいおい！誰が空気だ！誰が！」
クウキ

「ユウスケ、生きてたんですか！？よかった……」

「え、ええっ！俺が居ない間に何かあったの！？」

「……僕のお宝が……」ズズン

「こっちも何があったの！？」

「そっちは何時もの事だ。気にするな」

「はぁ……ん？何だこの写真。モモタロス達が写ってる」

「ほら、少々休んできたんですから、少しは働いて下さい」

「ち、ちよつと夏実ちゃん押さないで——うわっ！」ガラガラガラッ

「！これは……」

「土君！」

「ああ。どうやらあいつらとの縁は、まだまだ続きそうだな」

描かれていたのは、2つのメモリ、3枚のメダル、4つのスイッチ。
そして、7人のライダー。

仮面ライダーディケイド。幾つもの世界を越えて、その瞳は何を見る！

後書き

10《ディケイド》×40《オールライダー》を最後まで見て頂き、ありがとうございます。投稿日が不定期になったり、書き溜めが消えたりとトラブルに見回れましたが、無事完結出来て良かったです。

今回の作品の趣旨は”レッツゴー仮面ライダーの主人公にディケイドを加えよう”だったのですが、あくまで加えるだけなので、序盤ではほぼ空気になってしまいました。すいません。後半は代わってディケイド無双になりましたが、FFRの使用回数が6回と、使いすぎた感じが否めません。（因みに、”オールライダー対大ショッカー”は4回、”ディケイド完結編”では7回）後、白き闇やパンダ、カンガルーのネタはわかって貰えた方が居たので良かったです。特に白き闇は、本名をあえて出さなかったので分からないと思っていました。

それと、実はサブタイトルは、第1話から順にクウガ、オーズのサブタイトルから取っています。気付いた人は居たでしょうか？まあ、13話で気付いたかもしれませんが……

エピソードの後書きに伏線ぽいものを書きましたが、今冬のMOVIE大戦も書きたいと思っています。一応、映像ソフトが発売する来年の秋頃を予定しています。覚えていたら、また見て下さい。

最後に、この小説を読んで”ここが良かった”、”ここは直した方がいい”という意見があればどうぞお寄せ下さい。次回の作品に生かしていきたいと思います。

御閲覧、ありがとうございました。

MOVIE大戦MEGAMAX feat.フォーゼ（前書き）

注意

作者は映画本編を見ていません。矛盾しているところがあるかもしれませんが、ご了承ください。あと、これはあくまでネタバレなので実際に書く時は内容が変わる可能性があります。ご注意ください。

MOVIE大戦MEGAMAX feat.フォーゼ

「学園祭キターッ！」

天ノ川学園高校に祭りの季節が訪れる。

「はい。突然ですが、皆さんに転校生を紹介します」

「「「転校生？」」「」」

お祭り騒ぎに引き寄せられて、トラブルと共にあの男がやってきた。

「俺の名前は”門矢士”。例え制服だろうと完璧に着こなす男だ」

門矢士——仮面ライダーディケイド——

「へえ、あんたも仮面ライダーなのか。なら、俺とお前はダチだな」

如月弦太郎——仮面ライダーフォーゼ——

この二人が出会うとき、ライダー史上最大の事件が起こる。

「おい見てみる！空から女の子が！」

「くそっ！間に合え！」

「弦太郎！」

空の彼方より飛来する謎の少女。

「変身！」

「！変身したと！？」

「あれは……フォーゼドライバー？」

フォーゼの力を持つ”仮面ライダーなでしこ”。

「それを我々に渡して貰おう」

「撫子はお前らなんかには渡さねえ！」

現れる敵”財団X”

「へっへっへ。どうやら俺様の力があるみてえだな」

「先輩。今回は僕たちの出番は無いんだけど」

「……………え？」

遂にハブられる電王。

「デイクイドオオツ！貴様はこの”永久の仮面ライダー”に滅ぼされるのだ！」

「！お前は……」

「さあ、地獄を楽しみな」

再び立ち塞がる鳴滝と、復讐の仮面ライダー。

『final form ride F F F F o z e』

「ちよっとくすぐりたいぞ」

「うおっ！」

「へ、変形したー！？」

友情パワーによりファイナルフォームライドするフォーゼ。

「行くぞ、弦太郎」

『おっよー！』

『final attack ride F F Fوزه』

「『はあああああつ!』」

時間を越え世界を越えて、二人は何を見るのか？

2^w
× 000 フォーゼ伝説のラオダゲイド
× 3
× 4
× 7
× 10

来年、執筆予定！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860y/>

10《ディケイド》×40《オールライダー》

2011年12月20日22時57分発行